都名所圖會

尤言龍

再刻

3

都名所圖會巻之三目録

左青龍

安井観勝寺
下河原
花見圖
東大谷
吉水
瓜生石
佛光寺廟所
小松殿旧地
蹴上水
天智天皇陵
澁谷
本願寺旧地
牛尾山

金毘羅権現
蛙ヶ池
双林寺
長樂寺
知恩教院
白川橋
植髮堂
神明社
日岡
四宮川原
苦集滅道
蓮如上人塚
南禅寺 駒ヶ瀧

牛王地社
祇園社
西行菴
真葛原
一心院
御猿堂
明智首塚
東岩倉
姥ヶ懐
諸羽社
小町寺
西本願寺御坊
永觀堂

菊水
二軒茶屋
西行櫻
圓山安養寺
宗泰院
粟田天王社
長田首塚
將軍塚
御廟野
花山
山科
東本願寺御坊
悲田梅

來迎松
住蓮山安樂寺
黒谷金戒光明寺
吉田社 明星水 移沢
大文字送火
白川瀧
八大龍王
高野川
大原里
音無川
寂光院
比叡山
元黒谷

鶯の池
鹿ヶ谷万無寺
鎧掛松
百万遍知恩寺
丁莱寺
一乘寺村 下り松
赤山社
八瀬里
勝林院
呂律川
汀櫻
日吉山王
横川

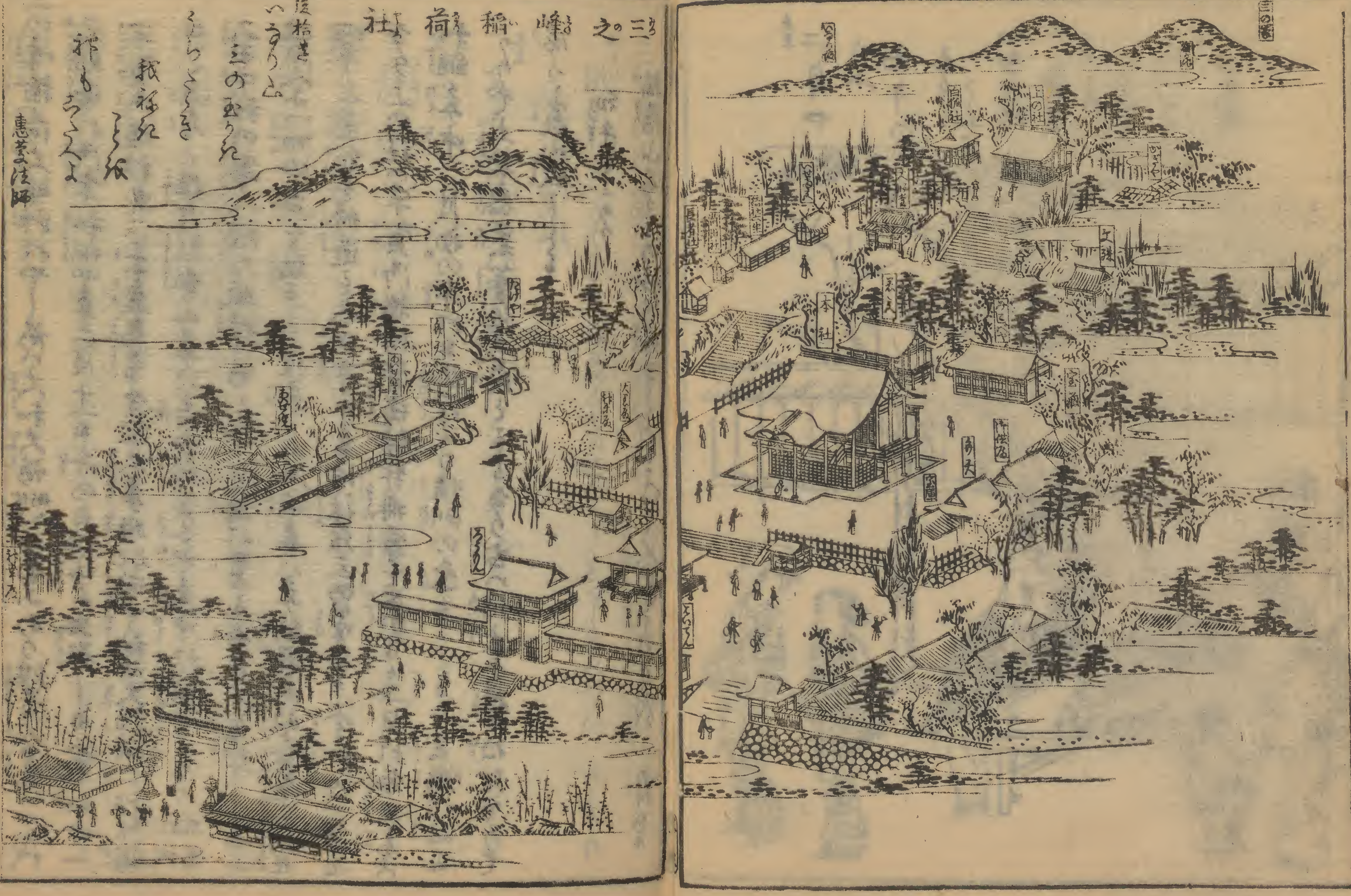
若王寺
談合谷
紫雲石
銀閣寺
將軍地藏
北山御坊
玉山社
背競石
來迎院
後鳥羽院塔
朧清水
無動寺
飯室

光雲寺
楼門瀧
真如堂 紅葉名所
月待山
白川石伐
詩仙堂
御蔭社
竈風呂圖
融通寺
古知谷阿弥陀寺
江文社
近江八勝遠景圖


二月や
先俊

三之峯稲荷社

後拾遺
いなり山
三の玉かき
うちたゝき
我祢きことを
神もこたへよ
恵慶法師



三の峰稲荷大明神社やしろは大和大路伏見街道の東にあり注若人皇四十三代
元明帝の御宇和銅四年二月十一日午の日此山に出現し給ふ本社第一
宇賀御魂神第二素盞烏尊第三大市姫已上田中社四大神此二神儀
世に五座と称し弘長二年に告ありて文永年中に併せ奉るなり　神祇拾遺
又田中社の客人神大歳神ハ鶴と化して稲の實を含んで來現して此山
にゆへに一切の為を勧るにより以て延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣
時平三箇社を修造とす又永享十年に社頭三の峯より今の地に移す
なり上の社ハ宇賀御魂倉稲魂伊弉諾伊弉冊尊を崇奉る二月の初午祭ハ
和銅年中二月初の午の日出現より恒例の祭事とする也稲の縁日
よりて土器泰粟等の土産とするなり古ハ神木の杉の枝をとりて
帰りて家に収しとぞ

初午をよめる

稲荷山しるしの杉の枝をまきあまねく人のかざしなりけり　能仲朝臣

三の峰の御注連縄は毎歳正月五日なり　古山の事後に詳なり今ハ物凋て小石流土葉にあれて稲荷川と云

拾遺　滝の水かへりてすまば稲荷山七日のぼれるしるしと思はん　読人しらず

稲荷詣の時

夫木　いなり山杉の紅葉こそしられたれあとをしのぶる標なりけり　周防内侍

例祭ハ四月上の卯の日也神輿五基九条の御旅所より東寺南の大門
を擁入て金堂の前に神輿をとゞめ産子ハ神供を頭に載て運び持く
献じ僧侶ハかゝはらく出て法施し東寺の僧正とりて一山の
衆僧ハ東西に列し絃召ハ東のかたに登り其厳重なる粧ひなり
なるべし是を東寺の神供といふ延年安永二甲午年より祭
礼の式再興ありて行列の首にハ勅裁綸旨。弓。楯の神具かざりて
神輿の後にハ社司のめん〳〵騎してそ供奉し唐鞍の神馬三疋其
外大幣。神。騎馬。菅蓋錦蓋等そのおほく続きなり巍々堂々として
壮麗なる祭式なり



東福寺
方丈
十三重塔
庫司
佛殿
山門
唐本
東司

東福寺北門
萬壽寺

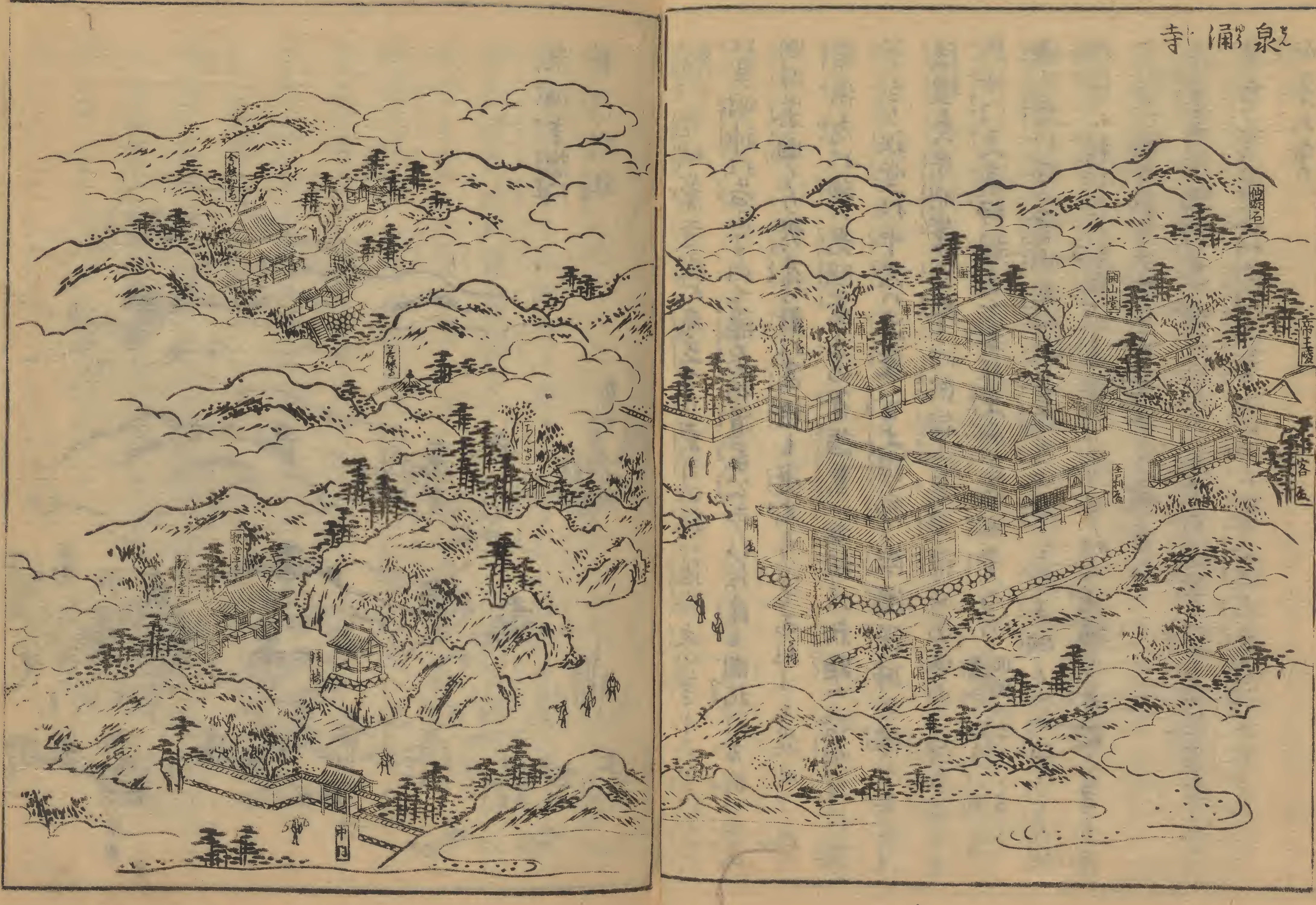


慧日山東福寺は五山の第四なり大和大路一の橋の南にあり當寺の開山聖一國師諱は辨圓駿州藁科の人なり十歳にして天台宗を学び十五才にして三大部を終て十八才にして園城寺にて髪を剃東大寺の戒壇にのぼり受戒せりあるとき三井を出て上野州長楽寺にゆく栄朝に随ひて別傳の道をまなび程その奥旨を極んとを欲し人皇八十六代四条院の御宇嘉禎元年に入唐し宋の径山寺無準を師とせり斯て六年を経て仁治二年の秋帰朝せり寛元元年花洛に至り九条大相國光明峯寺殿下（関白道家公）より東福寺を賜て住職せり弘安三年十月十六日七十九才にして遷化す偈曰利生方便七十九年欲知端的佛祖不傳。遷化の日當山の竹木色を白色に変じ樹皆枯より九十四代花園院の御宇正和のころ此道を聖一國師と宣旨を賜る此國師の號は是よりそはじまるとぞ（當寺の號は南都東大興福の両寺を合せて用ひられたり）山門には妙雲閣といふ横額あり足利将軍義持公の筆なり

佛殿の本尊ハ釋迦佛法堂ハ潮音堂と號す額ハ無準の筆なり
天井の幡龍ハ初兆兆殿司の筆なり此人大道和尚の弟子にして
諱ハ明兆字ハ吉山なり幼より繪ふ嗜みあるよし記ふ違あり龍
を画べ天ふそび不動とかそハ火炎のえろとかや或とし龍を画
にハまご生身の形をみんと願くハ佛神生身の形をみせしめ給へと
持念せるふ思園池の水漲上り生身の大龍目前ふ出現せり其形を
うつして天井ふ画兆殿司滅後ふ画龍ぬけ出く登天せしと云傳ふ
其後狩野光頼是を画今の幡龍是なり當寺の涅槃像ハ應永
十五年六月殿司五十七歳ふして画るよし服出ふあり本朝無双乃
像なれど世ふ名高し其外當寺に図畫多し一生画る繪具ハ神感
を蒙て稲荷山の山より出る今繪具谷といふ
方丈の額ハ張即之の筆選佛場の額ハ徑山無準の筆也本尊ハ
文殊菩薩聖観音ハ安置當寺の鎮守ハ成就宮といふ 石清水加茂 春日稲荷山王

五祖を 勅額を 光明峯寺殿の建立なり東司の額ハ張即之の筆十三重の石塔ハ
比良明神の告ふよりて藤丞相道家公志ろし建る園梧の古樹ハ開山
國師宋國より携来る厨の高梁も唐木ふして是も異国より渡る
常楽庵の額ハ光明峯寺の筆謚聖一國師の勅額ハ持明院の震
筆なり祖堂の中央ハ達磨 百丈禅師 臨濟禅師の像を安置ス
後壇ふハ光明峯寺殿下の影 徑山無準禅師の像あり傳衣閣ふ在
毘沙門天 薬師 観音を安ス是開山の昭堂なり 當寺鎮守の社なり 回禄の災ありてなし
通天橋の額ハ普明國師の筆橋下の溪を洗玉澗といふ此あたりに
楓多し秋のころ紅錦の色をあらはしこれを洛陽乃奇観とする十月
十六日ハ開山忌なり俗ふ無尚調しとて群参ス
五大堂ふハ不動明王を安ス正月廿八日火災除滅の札を出ス文字寺是之
萬壽寺ハ當山の北門三聖寺の西ふあり昔ハ六条坊門ふあり五山乃
列第五なり

泉涌寺

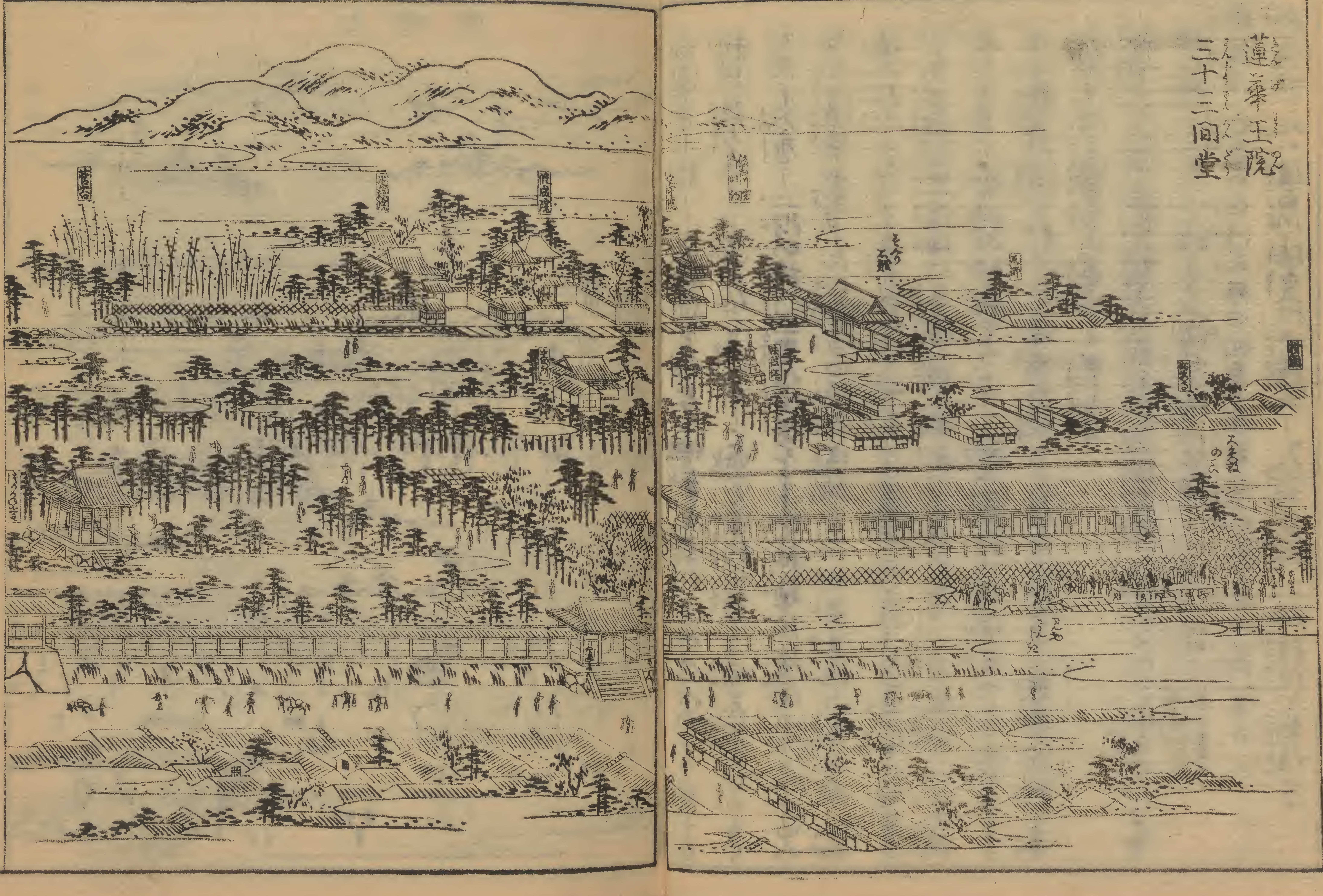




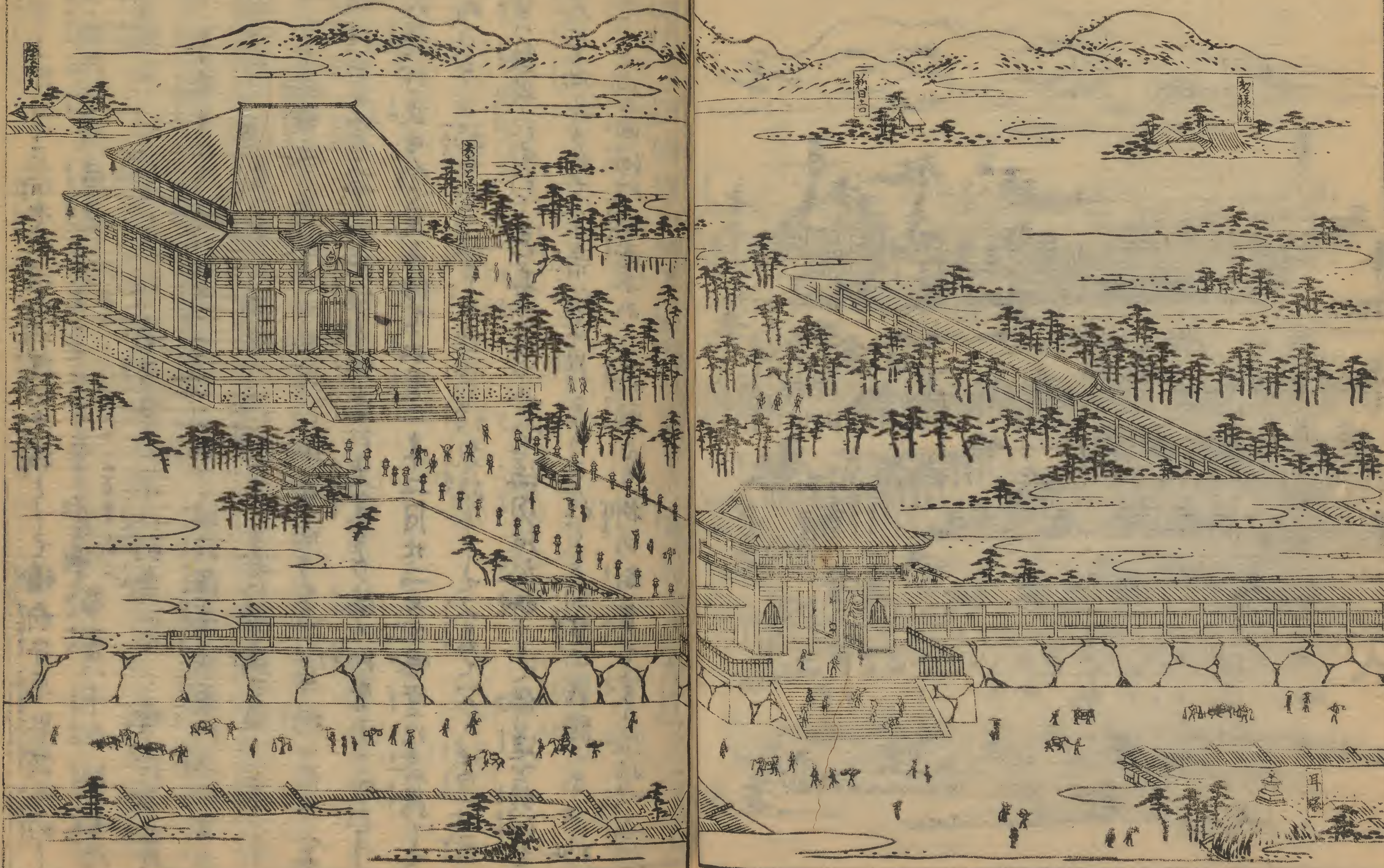
東山泉涌寺は大和大路一の橋の東にあり當寺の初は弘法大師の開基なり其後文徳帝の御宇齊衡三年に左大臣緒嗣公再建ありて天台宗となし仙遊寺と號を此山に仙人棲びし故なり中興の開山は俊芿法師號は我禅それより以來天台真言禅律の四宗兼學ぶとす當山の麓に靈泉涌出しけれバ號を泉涌寺と改む抑俊芿法師は肥後國飽田郡の人なり仁安元年八月誕生す天台池邊寺の珍曉が弟子となり十八歳にて落髪し十九歳にして太宰府の觀音寺にて具足戒をうけ二十二歳にて律宗を學び勤んため宋國にわたり四十六歳にして嘉定四年二月廿八日帰朝せり建保六年に和州の刺史中原信房が崇敬によりて我領地泉涌寺を寄附せり是より當寺に住職して後堀川院の御宇嘉禄三年閏三月八日六十二歳にして遷化せり

天子の官寺となるは八十六代四條院を權輿とせり此帝降誕の時

我禅々々と宣ふ後芿我禅和尚再生して天子の位に昇り四條院と
出誕しゆへよし人の夢にみへたるとぞ是より末代まで帝當山へ
葬り奉る陵は前帝神主殿の前にあり
佛殿の本尊は弥勒釋迦阿弥陀の三尊を安置す東山といふ額は
張即之の筆なり
舎利殿の本尊は佛牙の舎利なり二重の金塔に安置す抑此佛
牙の由来を尋ぬるに佛涅槃に入給ふ時羅刹足疾鬼ひそかに竊とりて
佛牙を掠奪さりしを韋駄天降伏をくはへとりかへし益夜に移る
身を殺し給ひて佛滅後一千六百余年を経て大唐の白蓮寺道宣
律師戒香薫修の威徳冥感にも通じけるにや韋駄天これを授け
三皈八戒をうけ給ひて其報恩に此佛牙をさづけまいらせしより人あるに傳り
白蓮寺に納め金閣の寶函に秘しおけるを日本に渡したまふ當山中
興の開基俊芿法師の宋国に渡りし尊勅を慕ひて
白蓮寺に詣し赤栴檀を供養して佛牙を恭礼し仰信のあまり竊に舎
利を懇望のよし述られども叶はずして空く本朝に帰りし猶志をやむることなく
かさねて入唐し二階の楼門三重の塔婆をつくりて袖縫して滄溟にうかべ送りゆへ
なく江陽軍に至りしかば白蓮寺の住侶遙かに感歎し大に寺の基源の志を感じ其
法の凡人にあらざる事を知りて酬答として東寶に伝ふべきよしにて佛牙一個なり
しかば是は万里渡海の本懐は偏に佛牙の未請にあり二度来朝の素願
なりしかばつまり舎利の利益を得よし奥に述られば忽佛牙の付属をゆるし
給ひ歓喜の涙をながして帰帆の纜をとかれまかりゆへなく彼御舎利を奉じ
朝にかへりし當寺の本師と崇奉る
観音堂の本尊聖観音は玄宗皇帝楊貴妃に別れを悲しみて追善のため
妃の貌をうつして作り給ふ補陀落山の額も此帝の筆なり 洛陽観音 卅三の其一
新熊野観音は弘法大師の作なり西国順礼観音の其一なり
新熊野社は後白川法皇の御願として紀州熊野三所権現を勧請せり


蓮華王院
三十三間堂

大佛殿



蓮華王院三十三間堂ハ後白河院の御願として備前守平忠盛奉行し千體御堂を建立し給ふ（堂東向南北六十六間二間を備て柱を立られハ三十三間あるよし）本尊ハ千手観音乃坐像にして御丈八尺作ハ康慶なり二十八部衆おのおの壇上に安置し千手観音一千體ハ堂内左右にまします作ハ運慶湛慶の両作なり抑後白河法皇ハ常に頭痛の御悩ましませハ醫療さまざまなりしかども其験更になし或時熊野に御幸ありて此事を祈らせ給ふに權現告て宣ふやう洛陽因幡堂に天竺より渡りし名醫あり此に治療を乞ふべしと是に依て永暦二年二月廿二日因幡堂に參籠して祈らせ給ふに夜半に貴僧忽然として又告ていはく法皇の前生ハ熊野にありて蓮華坊といふ人なり海内を行脚して佛道を修行し其薫功によりて今帝位に昇らせ給へども前生の髑髏いまだ朽ずして岩田河の水底にあり其頭より柳の樹貫て生ず風の吹毎に動揺す則今身に響て此悩を生せり急ぎかの髑髏を取上なハ苦悩を免るべしと告給ふ依て法皇の頂を洒と思召て夢覚て軈て其所を尋させ給ふに河底より髑髏を得たり則千手観音の頭中に籠三十三間堂を建立して蓮華王院と号す其柳の樹を堂の梁となさしむ（已上平等寺縁起の意）又或説にハ鳥羽上皇得長寿院を御造営ありて一千体の觀音を安置す後改て蓮華王院と號すともいへり（蓮華王院ハ[illegible]の御殿ある門外の[illegible]佐々木志津磨が額なり）堂前に夜泣泉あり傍に池ありて春のすゑより初夏に至り燕子花咲乱れて濃むらさきの色池の面に麗しく京師の騒客遊行の茶店に宴を催して終日これを賞ずと當寺の佳境なり

大矢数の濫觴ハ新熊野観音寺の別當梅坊射術を好み八坂の青塔の的塲へ通ひ帰さに當寺の後堂に休ミ射初しより是より連年諸侯の家臣射術の誉を争ふ當所より通矢の検證出て其一を競ふとのよし金沢何某を渡を尾州より星野勘左衛門八千筭を通し貞享三年四月廿七日紀州和佐大八郎總矢一万三千五十三通矢八千百三十三数よして一を得たり

新日吉社ハ後白川院の御勧請なり舊地ハ是より東にして日吉坂と
云ふ所なり應仁の乱に破壊す其後妙法院尭然法親王再
建し給ふ例祭ハ毎年四月廿九日にして又五月九日ハ神輿妙法院宮御殿の前に渡る
智積院ハ宗旨眞言新義なり本尊ハ不動明王興教大師の作也開山ハ
正憲法印當寺ハ豊臣秀吉公の子棄君早世せられしに祥雲寺を草創ある
紀州根来寺滅て後覚鑁派の断絶ふより新義の徒是を歎て
御當家に愁訴を是ふ依て祥雲寺を賜て智積院と號し新義派の学窓と成
養源院ハ宗旨天台なり本尊ハ阿弥陀佛恵心の作當院ハ浅井備前守
長政の草創にして開山ハ盛伯法印なり
修成院の本尊ハ元三大師傍に歓喜天を安す
寶生院ハ本尊毘沙門天なり後白川法皇の宸影を安置す
妙安寺ハ蓮華王院南の門外池田町の端にあり虚無僧の本寺とす
西国ニ三十三所これに属す達磨普化を祖師とす

樹園ハ妙安寺の南にあり松永貞徳住ひし遺跡なり
貞徳家集曰
大和大路のほとりし大佛殿の南に地を求て樹果と名づけ菜を見
実のなる木植て趙子昂が書し法華経を梓にちりばめ千部すりて
八千蔵よりぞうにて報恩経を造り納めし因陣の戸をひらきて聖徳太子
達磨大師の御影人丸貫之定家紫式部の影像をかけし妙法院
二品法親王尭然讃をたまはりける四ケの月の戸まゝりを今の花扉とつらひ
芦の丸屋をかまへやどりける中の八日よりは日々東光院殿玖山公泰勝院
玄旨法印の法楽の会をぞはじめ 下略

貞徳翁童名勝熊といひしとき九條殿下へまゐり源氏物語を讀せられ
孟津の所掛未写御ゆるし所々にて今の功終りければ御座敷かしこに
御筆を染られける源氏のよきくせそみてより三箇の大事止観の所説まで
相承して後妙童女考案の連歌を敷島に殿下より世にうつして御発句に

花に從道やそへん行末の春　九條殿下

春ハつるこぞのひるもぬる袖　勝熊

雪とそよすみ野のきじを鳴すそ　玄旨法印

大佛殿方廣寺ハ後陽成院御宇天正十六年豊臣秀吉公の御建立也
本尊ハ盧舎那佛の坐像御丈六丈三尺佛殿ハ西向にして東西廿
七間南北ハ四十五間あり楼門にハ金剛力士の大像御長ハ二丈四尺
あり門の内にハ高麗犬あり金色にして長七尺よありしとかふ これハ豊国のやしろ
廻廊ハ南北百廿間東西百間あり堂前に建る石燈籠ハ諸国
諸侯の名を刻む佛殿の基石又正面石垣の大石よハ国々出所の名或ハ
諸侯の紋所等あり廻廊の外にハ桜の紫紋交へて植たり
慶長七年十二月四日にハ佛殿回禄とは十五年右大臣秀頼公
おとゞく再営ある寛文二年本尊銅像を改て木像としたまふ
太閤秀吉公の石塔婆ハ佛殿の南にあり豊国崩として後これを営し
といふ塔前の石燈籠にハ慶長十年九月とあり
撞鐘堂ハ南廻廊の外にあり四間四方にして柱の数ハ十二本あり鐘
の高さ壱丈四尺指わたしハ九尺二寸厚さ壱尺

継信忠信塔

佐藤氏の兄弟ハ忠肝義膽の人にして漢の紀信宋の天祥にもおとらざる英士也善名後世にかゞやきて武士たるもの今以墓を貴むるなる

右石塔婆昔ハ十三重なりしかど星霜ふるまゝに次第に崩れ今ハ土台の四方に園あり



洛東大佛餅の濫觴ハ則
方廣寺大佛殿建立の時
より此餅を商ふ事久しく名
其味美にして煎て湯に
炙ても芳して陸放翁が焼餅
東坡が湯餅にもおとらざる
名品也唐破風作の額標ハ
玉水氏なりて代々あり住
て遠近に其名高し

大佛餅を瀧本坊へおくるとて　安楽庵　策伝

白妙の
雪の
すがたを
もちながら
かちんといへる
名のふしぎさよ

返し　瀧本坊　惺々翁

白妙の雪の
すがたも
あれかどん
色とのもちなそ
きりひつくされ



耳塚ハ二王門の前にあり文禄元年朝鮮征伐の時小西摂津守加藤主計頭を大将として数萬の軍兵を討たる首を日本へもちこさんも遠路なれハ斬劓して送り此所に埋耳塚といふ

平相国清盛公六波羅の館ハ今の大仏殿の地中央にして北ハ五条南ハ七条に限り大和大路に門あり次平正盛忠盛三代の地なり清盛公に至りてハ境地広大にして殿舎ハ棟を並べ棟を接し楼閣あまた香木の聚る南の方に大きなる池あり傍に水亭を造りこれを池殿といふ凡亭宅の数百七拾余宇に押ならべて内府重盛公の居宅小松殿とぞ二十余町の間殿宇建続きたり其外家々眷属の住所五千二百余宇ありとぞ平家滅亡の後も此所にありて北条泰時同時房等ここに来て政道を行ふ又正慶二年五月千種中納言忠顕赤松良忠大軍を以て六波羅を攻破る北条時益仲時後伏見上皇新帝を供奉して関東へ逃落る此時六波羅の館断絶す



洛東五条坂又
粟田口の陶工の輩
并観勝寺領の
日の岡の土を制して
はるそこの数
煎しく茶には
損じとも味変らぬ
なり是風土の
奇といふへし

小松谷正林寺は大佛殿の東にあり宗旨は浄土開基は恵空上人なり
本堂は殿舎造りにして九條殿よりの御寄附と云壇上には勢至大師
の像并安置後面の方に阿弥陀堂あり楼門の額は九條関白尚實公の
御筆也明和年中にいたる所也此地はむかし月輪禅定兼實公の御所也
小松殿といふ法然上人此殿の御堂に移り住し給ひしと黒谷傳記にあり
千とせふる小松のもとをすみかにて無量寿仏のむかへをぞまつ　源空上人
此所より西人家の北の方に谷あり是を小松谷といふ小松内大臣重盛公
の山荘にして燈籠堂の地なり　委は盛衰記にあり
三嶋明神のやしろは馬町北側にあり當所の氏神にして産子は一代
鎧を禁するといふなり
継信忠信の石塔墓は馬町北側民家のうしろにあり石は大塔二基銘
曰永仁三年二月二十日願主法西とあり一基は銘なし
阿弥陀が峯は豊國の後山なり慶長三年豊臣秀吉公を此峯に葬る

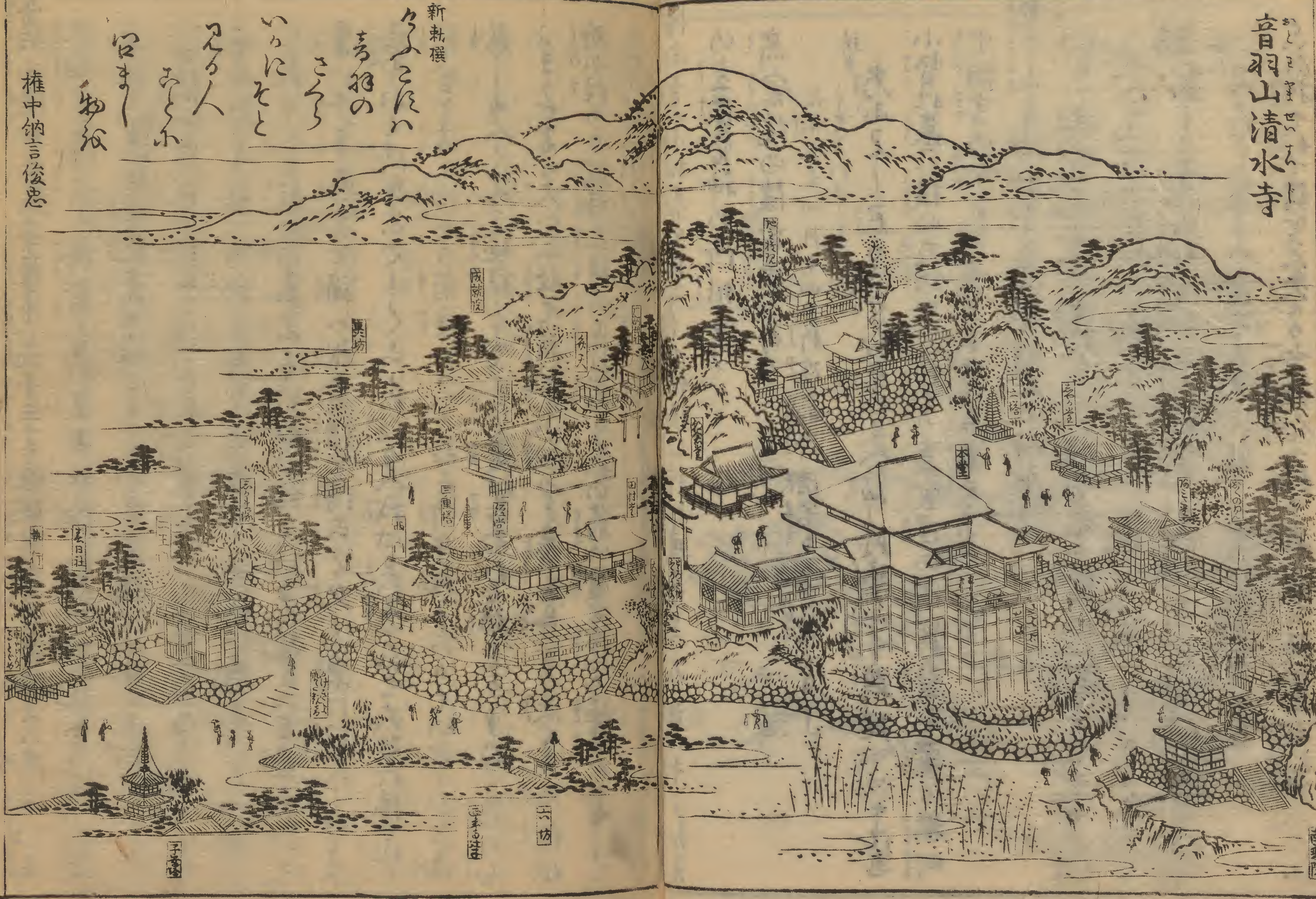
小松谷
正林寺



清閑寺は小松谷の艮にして佐伯公行が建立なり本尊ハ千手観音
の立像菅神の御作なり
高倉院の陵当寺にあり
治承五年四月十四日新院崩御清閑寺にて煙とす
新古 そてまゐるしるしに
常にみし君の御幸をけふとへハ帰らぬ旅と聞そかなしき　法印澄憲
小督が墓ハ陵のかたハらにあり高倉院の御寵愛を蒙る桜町
中納言の女なり　委ハ平家物語盛衰記にあり
歌中山ハ清閑寺の北音羽山の間をいふ
寺説 むかし清閑寺の真燕僧都といふ人住けるある夕ぐれ門外にたゝずむところに行
かふ人を見ける折ふし艶なる女来りて通りゆくを見て忽ち
愛心おこりあれどもいひかくべき便なくて清水への道ハ何れぞと問けれバ女
見るにさへまよふ心のはかなくて誠の道をいかでしるべき
といひ捨て行方を見失ひぬる女ハ化人にて縁の程や其所を歌中山といふ

清閑寺





音羽山清水寺
おとはさんせいすいじ
新勅撰
権中納言俊忠
本堂

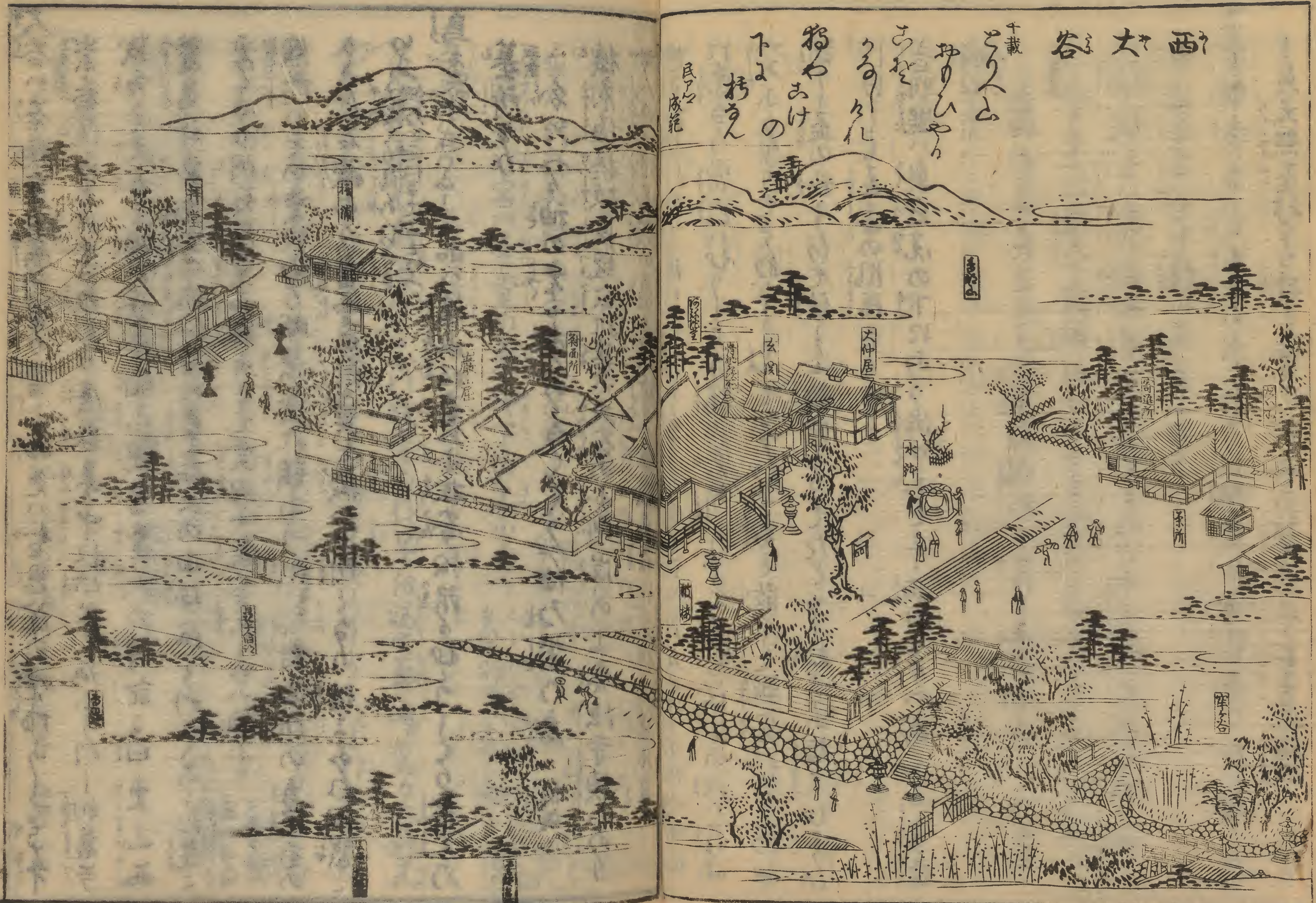
音羽山清水寺の本尊十一面千手千眼観世音菩薩脇士ハ毘沙門天
地蔵菩薩なり抑當寺の来由を尋ぬるに大和国小嶋寺に沙門延鎮
宝亀九年の夏霊夢の感ずる事ありて木津川の辺りにいたりてみれバ
一つの流に金色の光あり源を尋て直に登るに一流の瀧あり傍をみれバ
茅ぶきなる庵に白衣を着せる老翁あり延鎮此庵に入て御身ハ
いかなる人ぞ翁の曰我名ハ行叡此地に住する事ハ既に二百年に及べり
常に千手真言を誦ス我貴僧を待こと久し東にいたらんとおもふ
志あれバ御身まづしばらく爰に住すべし我此霊木をもつて大悲の像を作り
精舎を建ん願あり岩屋くへりぬれバ御身我にかはりて此ねがひを成
就したまへといひて延鎮をよろこび爰に告あれバ辞するにあらねバ翁の心
にまかせけるに翁ハ大いに悦て東に向ひて庵を出さりぬ其より延鎮此
所に住めり或時山科の東の峯にてかの翁の履を拾へり延鎮おもへらく
さてハかの翁ハ大悲の応現ましましけるよとありがたくおぼえよく大悲の
尊像を安置せんと祈りけるがいまだ果さずして年月を送りしに
延暦十七年に将軍坂上田村丸産婦のために鹿を猟して音羽山
にわけ入かの草庵に至り延鎮田村丸に逢て翁の志をかたりける故
告る田村丸渇仰のおもひ深くなりし屡延鎮の相好を見るに神仙のごとし
是即大士の化現ならんと信心いやまし家に帰て妻女にかたりけり
妻の曰わが病を治せんとて多くの殺生をなしたり此罪をいかにしてぬぐはん
懺悔し其数に余りせよく大悲の尊像を安置し奉らバいかでか乃利
益なかるべしと夫婦心をあはせて観音堂を建て延鎮に寄附せんとする故
約をなし行叡かつて採りし霊木を以て観音の像を作らんとする故祈りて延鎮
其夜夢中に十一人の僧来りて大悲の像を作る長八尺十一面四十臂の千手
観音を造り終って十一人の工僧行方を知らず爰に於て田村丸奏して尊
容現しおはりて目前にあり當寺本尊是なり夫より仏殿を建んとおもふに此地
嶮岨にして天地もなかりけれバいかがせんと心憂りしに其夜多くの鹿きたりて

座をうつされし地なれバ佛殿を造りて大悲の像を安置し奉りけり　鹿間塚ハ此辺にあり
脇士地藏毘沙門天ハ延鎮法師の作なり田村丸延暦二十年に詔を
うけて東夷征罰の時此本尊に祈りしかバ観世音地藏毘沙門天は彼
戦場に現じ給ひてことごとく退治し給ふ同廿四年に田村丸太政官府
の宣旨を蒙りて堂塔を建立し勅願所となし又大同二年紫宸殿
をたまひて伽藍となし観音寺を改て清水寺と號せり
奥之院の本尊も千手観音の立像なり此地ハ延鎮法師草菴
の跡なりとぞ
阿弥陀堂を瀧山寺と號す本尊ハ阿弥陀佛の坐像を安置す文治
四年五月十五日法然上人瀧山寺にて不断常行念佛を開闢し給ふ
今に退転なし朝倉堂ハ越前の國司朝倉弾正貞景是を建立す
田村堂にハ田村将軍鈴鹿権現行叡延鎮等の像を安置す
梟水ハ中門の西にあり靈泉にして地中より涌出り寒暑に絶ず
地主権現社やしろハ大己貴命なり例祭ハ四月九日清水坂八坂郷
の祭なり當山ハむかしより桜の名所にして春も弥生の比ハ花笑
一入にかをりてさながら雲とつらなり花ぞ雪と散りて瓢客のこゝろを
動し盃の数をかさね詩歌よみてたのしむ様くに縕人むまなび
はけしも春色の風流なり
音羽瀧ハ奥之院の下にあり瀧口三すじ西の方へ落て四季増
減なし

新古今
音羽山さやかに見ゆる白雪を明ぬと告る鳥の声哉　高倉院

家百首
みるまゝに清き心ハ瀧津瀬の水底までもにごらざりけり　為盛

爪形観音ハ悪七兵衛景清爪をもつて千手観音を石面に彫し
景清守本尊も傍の庵室にあり
子安観音ハ車舎馬止の南にあり光明皇后孝謙帝を安産し給ふ
よつて天照太神より授り給ふ一寸八分の観音也今本尊の後内におさむる


西大谷
千載
成範

大谷ハ本願寺の廟所なり當山初ハ知恩院の境地にして吉水

崇泰院にそれ跡あり慶長年中に此ところに移されし則舊号を

以て大谷と称す當寺開山親鸞聖人の傳記に曰東山西

麓鳥部野南延仁寺にて奉葬せし由を記されたり遺骨を

又くらり阿弥陀堂西面にして堂内に龍谷山といふ額あり 寂如上人の筆なり

廟所ハその東にあり明著堂の額あり 良如上人の筆なり 對面所の庭上南の

かたに石藏あり當寺の什寳を藏むる所とす俗にこれを岩屋と

いふ 大谷より清水へかよふ細道を通ふ辻まで

鳥邊野 或ハ鳥部とも書 北ハ清水坂南ハ小松谷に限る むかしより諸宗の

墓所なり

玉葉 名ちる袖の別に思ひのすくくも底の紫乃雲 俊成

後京極摂政良経公の墓ハ大谷の北側岸の上要法寺領にあり

世人誤て京極殿の墓といひ近年まで家為右先生の碑の邊にありて其碑を

靈鷲山正法寺ハ往昔傳教大師の開基にして山門の別院なり中興

國阿上人住ありて宗旨を時宗と改む本堂ハ釈迦佛を安

置す阿弥陀堂の本尊ハ當佛と号す 此阿弥陀佛ハ笑ひ佛と云ふ當世に當佛と號す

天照太神宮ハ本堂の東廊下の上にあり 山下の念佛堂ハ別時念佛

其國阿上人ハ大菩提心にして慈悲ふかく常に伊勢太神宮へ足跡をと

ゞめ参宮ある時道中にて女の髑髏あれは是を葬り通りたまひ

化して上人の御前に出て本様にかへりけれと神勅あれて

やもくし参宮しぬ故に参宮の人ハ参宮の前に當山に来ねまとへは足穢を

當山の坊舎ハ高く絶景なり洛陽の萬戸鴨川大井川の二流愛

宕あらしの峯々淀山崎の通路まで書院より坐にして眼の下に遮る

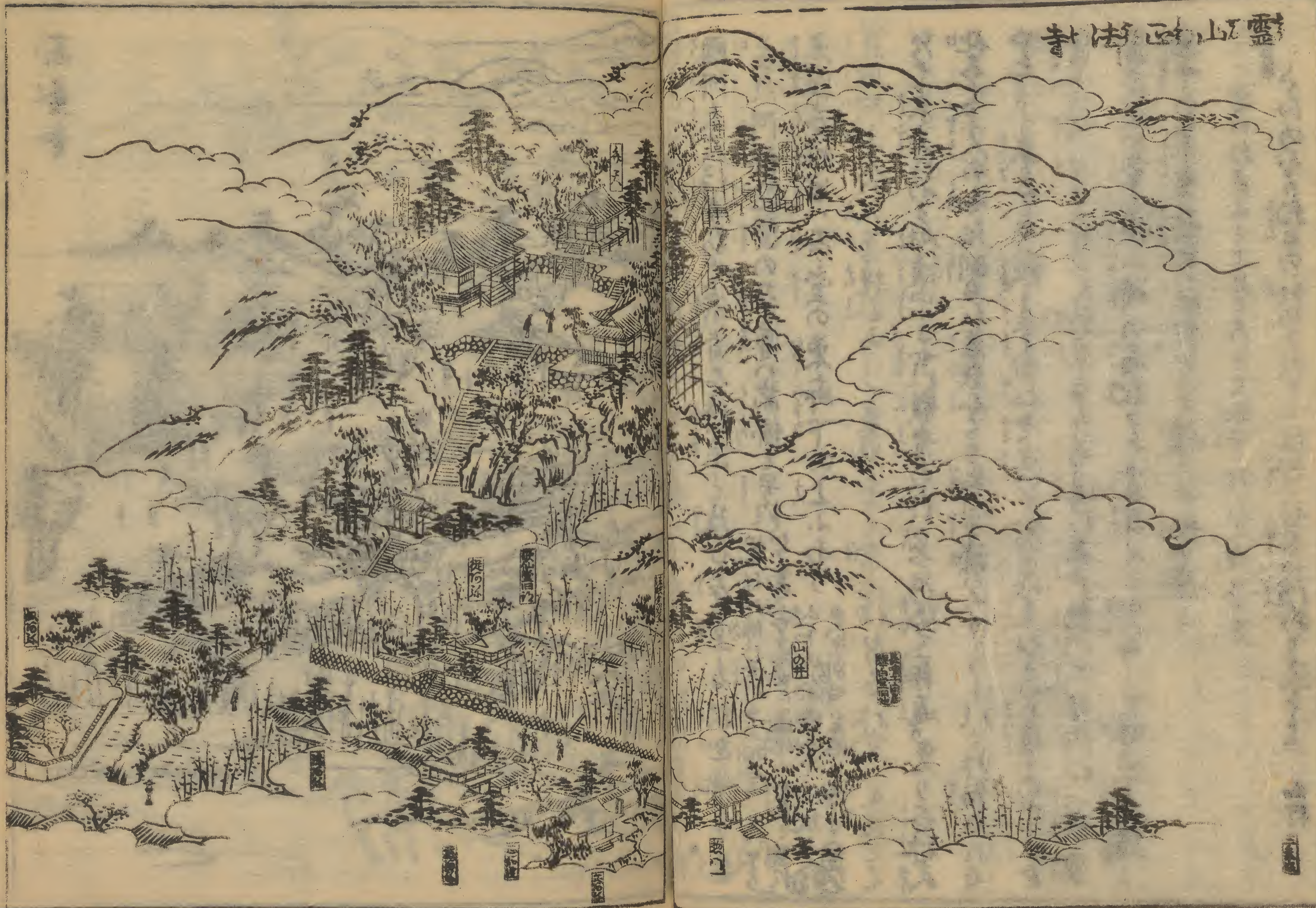
洛中の集會遊宴ハ此院々を借りて饗應を

雪のあ見ゆ山とところにて眺むる人こそなけれ

家集 ふけのほる日の影のさへに都には雪は消みゆく人もなし

西行

霊山正法寺




高臺寺
方丈

鷲峰山高臺寺ハ慶長年中に太閤秀吉公北の政所御建立乃
菩提所也古ハ雲居寺にして自然居士住せしなり宗旨ハ禅 臨済家
中興開基ハ三江和尚なり
佛殿の本尊ハ釈迦佛迦葉阿難を安置す達磨大師の御厨
子ハ政所公の御車を用ひらる方丈の唐門ハ秀吉公の伏見城
をもつて営しとらへ客殿南向にして襖の画ハ土佐光信狩野永
徳弘意了溪等なり欄物彩色美麗を尽せり本堂ハ本尊観音
を安置す小方丈ハ秀吉公の旅寝し和歌十首を掛かる
聖護院道澄法親王の御筆なり開山堂の額ハ重閣にして
雪月堂の筆天井ハ政所公御車の上屋を用ひらる三江和尚
常光院殿の像を安置す祖堂なり廊下を臥龍廊とて霊
月堂の額あり これより坂をのぼれハ秀吉公并の政所の御霊舎あり
長押に三十六歌仙をかゝぐ画ハ土佐光信和歌ハ八條智仁親王
の筆なり其外内陣の画ハ狩野古右京の筆多し山上に傘
亭ハ千利休が好む所なり岩栖洞ハ良れ山腹にあり古ハ岩栖院
の旧跡なり
當寺ハ大木の桜数株ありて妖艶たる花の盛ハ園中に於て宴
を催し是を惜むの輩もかぐら多し又秋の頃も萩の花いみ
じくみやびやかにいろへて騒人も遊覧を足る當境の佳観
なり 姥桜ハ山下の坊中にあり 太閤桜ハ其一面に繁る
八坂法観寺ハ上宮太子の草創なり古ハ楼門伽藍鎮守等厳重
なり破壊年経て今塔のみ残る
五重塔一基本尊ハ大日釈迦阿閦宝幢 東のかたに太子堂あり此の中に小堂ハ
薬師如来毘沙門天歓喜天を安置す むかし浄蔵貴所此寺に住
をあるとき塔大いに傾く浄蔵塔前に坐して持念し朝にこれを
見れば塔直にしてもとのごとし 元亨釈書意をとる

八坂法観寺

八坂の踊ハ文月なりき
くわうさいの指南とぞ
西は東ゆくるに老若都
鄙のわかちなくむれつどひ
日さかりくびうたけなひ
して塔のまへに満ちな
るし押ごうえゆきて
の人えぬせんと木戸
口よりえらりそかれと
これいとと興じ
つゐに一夜妻の姨
とかし然寛保
延享の頃ぬめて作りしつ
今ハ絶てなし



八坂庚申堂ハ塔の西にあり大黒山金剛寺延命院と号す本尊青面金剛にして長三尺五寸大寳元年正月七日庚申に降臨しぬ日本三之庚申ハ其一なり（摂州四天王寺 江戸浅草）脇壇に聖徳太子大黒天を安置す

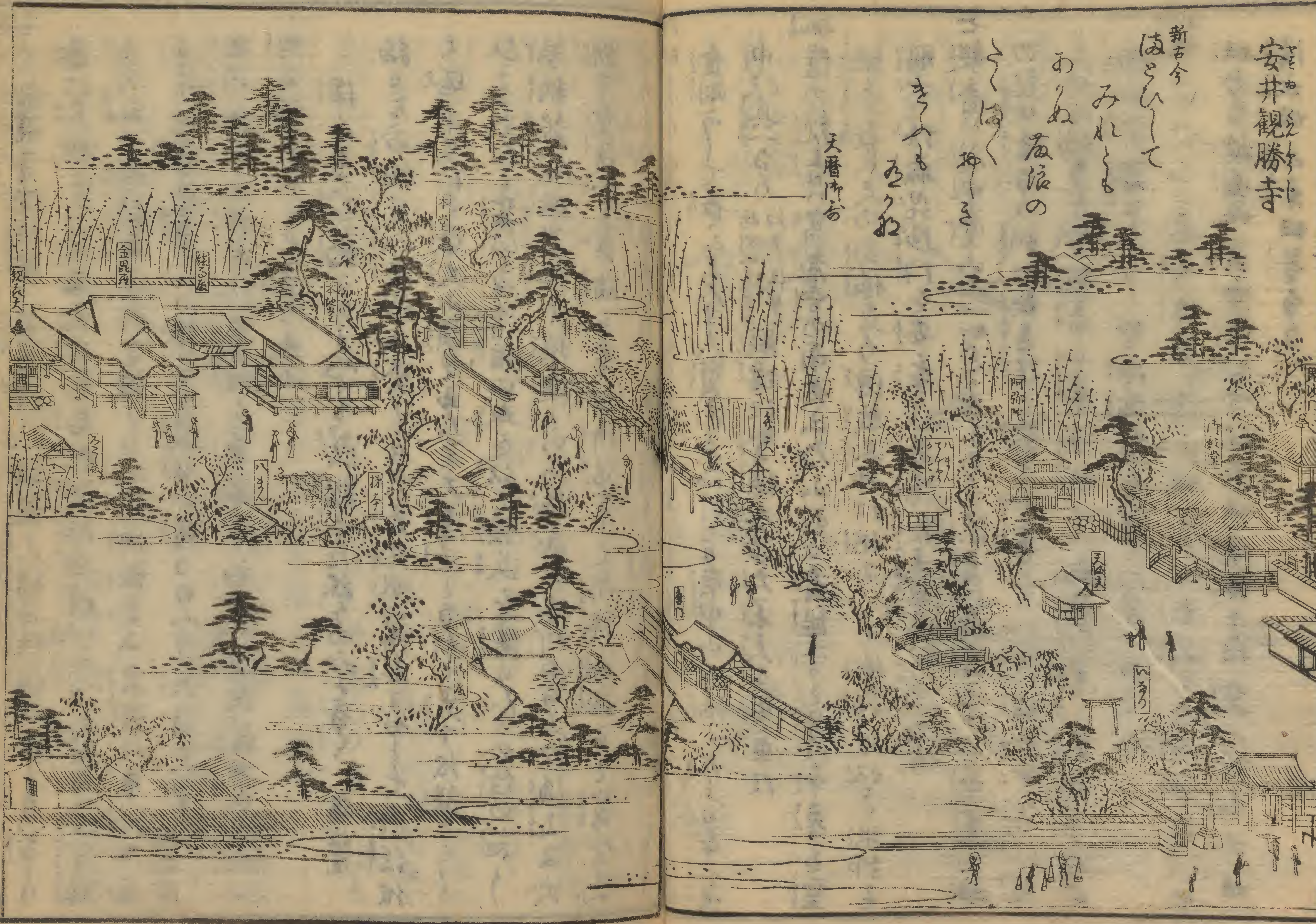
伽羅の観音ハ高台寺の南足山にあり青龍寺と号す本尊ハ聖観音長三尺の立像なり傳教大師の作にして伽羅ぬもく彫刻す脇士ハ地蔵毘沙門を安置す洛陽観音四十八所の其一なり

七観音ハ庚申堂の西一町ばかりにあり宗旨ハ真言にして本尊ハ七躰の観世音なり則七観音院と號す中尊ハ如意輪観世音弘法大師の作なり聖観音千手准胝十一面馬頭不空羂索等の六躰の作ハ春日なりと云洛陽観音四十八所其一なり

八坂といふハ北ハ真葛原南ハ清水坂までの惣名なり其中に八ツの坂あり祇園坂 長楽寺坂 下河原坂 法観寺坂 霊山坂 山ノ井坂 清水坂 三年坂等なり

安井観勝寺

新古今
まとひして みれとも あかぬ藤浪の たゝまくおしき けふも あるかな
天暦御哥



安井観勝寺光明院ハ安井御門跡前大僧正性演再興したまへり古より藤の名所にて崇徳天皇の后妃阿波内侍此所に住せ給ふ天皇保元の乱に讃岐国へうつされ給ひ侘しくして御画像に束帯せる尊影御随身二人の像を画て此の地より皇后に送りたまへり其後天皇〈讃岐院と申ス〉配所松山に於て大乗経を手写し和歌一首を添させたまひて都の内に納めんとて送りたまふ

浜千鳥跡ハ都にかよへども身ハ松山に音をのみぞなく　讃岐院

然るを少納言入道信西奏しけるハ若呪咀の御企ましまして御経を返しければ帝大に憤りたまひて大魔王となりて天下を悩さんと誓ひたまひ御指の血を以て願文を書たまひ彼の経の箱に奉納龍宮城へ記し堆途といふ海底に沈めたまふに海上に火燃て童子出て舞踊を見せ御経所願成就をと宣へりまた爪髪を截おろしたまひ六年を経て長寛二年八月廿六日崩御しまへ御年四十六讃州松山の白峰に葬りまつる〈已上保元記に見えたり〉御霊此地に来て夜く光を放つ故に光堂ともいふ後に太閤法師といふ真言の名僧此所に来りて此縁を崇徳帝尊霊の現じ往事の趣を示したまへり太閤これを奏達し詔を蒙りて堂塔を建立しかの尊霊を鎮め奉り光明院と号しける仏殿の本尊ハ准胝観音なり御影殿にハ後水尾院の宸翰明正院並に東福門院の営牌を安置し奉る又弘法大師像あり奥の社ハ崇徳天皇ならびに金比羅権現南の方源三位頼政世人おしなべて安井の金毘羅と称し都下の諸人常に絶へる事なし崇徳帝金比羅と一体にして和光の塵をまじへ擁護の明眸をたれたまひ利生霊験いちじるしとぞ見へたる

当寺の門前を新更科と号し中秋にハ洛陽の騒客きたり集りて東山の月を賞ずる今ハ家居繁く遠ざかりて風景の変へ

牛王地社ハ下河原の南にあり祇園牛頭天王播州廣峯より神を遷座しけるの地なりとぞ祇園百度参りハ本社より此社に詣し其の数を定むる皆より例なりとぞや下河原を百度大路といふ名あり舊記に見えたり

菊水之井ハ同所東方にあり滋泉にして茶に可なり菊洞の下流此ところにあり故に號るとぞ菊洞ハ石橋をわたり是より安井境内鎮守天神の社の前を通り建仁寺を経て鴨川に入

蛙が池の古跡ハ下河原の西安井北門通民家の奥にあり此地に妙法院御門跡尊性法親王性恵法親王住せ給ふされば小坂殿といふ四条の南なれバ綾小路宮とも号ス慶運方往生拾解ニ曰綾小路とハ後高倉の皇子天台座主にておはしましけるがましませし比住給ひし小坂殿の棟に鵄ゐむれバそれ池の蛙をとりくひけるを然出しきたるに宮しらり

徒然艸ニ曰綾小路宮のおはします小坂殿の棟にいつぞや縄をひかれたりしかバ彼ためし思ひ出られ侍ると一徳に識や鳥のむれゐて池の蛙をとりけれバ御覧じ悲しませ給ひてなん人の語りしこそ小坂殿の地ハ法然上人の弟子長楽寺の隆寛律師を

下河原ハむかし今の建仁寺の地なり東居るの此より谷川流を出て一面の河原なり驟雨の時ハ滝のごとくして下流ハすそハ宮川と号し鴨川に流れありかり侍るが今ハ何れも世かりかわり山崩れて川埋埋ミ高楼飛観新築をならへ歌舞の妓婦花やかに出立てかのあたりをさまよふ人もおほくたゞふとゝまりぬべき世の中をあらたまりたるとかや



祇園社



祇園社ハ下河原にあり南面にして鳥居ハ石柱にして感神院といふ竪額あり照高院道晃親王の筆なり西南の樓門にも御額ありいまハ

神殿ハ中央ハ大政所（牛頭天王 素戔嗚尊垂跡）東ノ間ハ八王子（三女五男）西ノ間ハ（稲田姫 本御前）

按祇園牛頭天王ハ愛宕郡八坂郷感神院に勧請せし濫觴を聖武天皇の御宇天平五年二月十八日吉備大臣唐土より帰朝の時播州國廣峯に垂跡しおはしまし叡崇ありて其後常住寺の十禅師圓如上人に神託ありて帝城守護の為貞観十一年に遷座しめ給ふなり中臣祐抜に曰清和天皇貞観十八年疫神祟をなして世の人疾に悩むこと奴の如し爰に卜部日良麿洛中の男女を将て六月七日十四日疫神を神泉苑に送りてより年々かくのごとく志めけて祇園會といふなり神輿を垂所をバ八坂郷感神院といふ寺なれど神殿もなかりしに昭宣公の御殿を施して神殿となし祇園ハ常に殿舎を造りて是を精舎といひ後人又祇園の名を付かへたり 續古事談ニ曰 祇園の寶殿の中にハ龍穴ありとなん延久の頃梨本の座主（天台梶井御門主）其深さを計らんとせしに五十丈におよびてなほ底なしとぞ

牛御前ハ素戔嗚の御子なり後見殿ハ大己貴命と申其外摂社末社ハ圖画にあらはせり又太師ハ神殿東の庇の間にありしが安永七年繪馬堂の西にうつせり（日本略記ニ曰天延元年五月七日以祇園為天台別院）

藥師堂ハ觀慶寺と号す本尊ハ藥師如来作ハ傳教大師なり陽成院の勅願所にして開基ハ圓如上人といふ（當寺の撿校ハ梨本なり）

祇園御霊會六月七日十四日山鉾の行粧祭礼の例式其外五月廿九日六月十八日の神輿洗ひ等世の知る所なれバ委く記さず凡洛陽の祭礼多しといへど此會ハ殊に壮観のかたなくしられバ略く是を記すなり臨時祭ハ延久二年三月十五日に始めありとぞ（古ハ六月十四日にして走馬勅楽東遊御幣を感神院に奉らるよし日本略記に見えたり）

又例年の神事ハ元朝寅の刻なり天下安全の御祈禱なり

新古今

桜咲く遠山鳥のしだりをのながながし日もあかぬ色かな

太上天皇

それ桜ハ本朝風土の名花なり其種類凡六十九品ありといへども洛東の地勢温純にして桜樹相應し清香他境に秀でたり中華にハ桜樹いまだあらざれバさればむかしより桜花の詩賦なし只真澄なり桜樹の桜の字ありて桜花文字なし近今清朝の人長崎渡来ふ桜の美を賛て本國ふうつし来りしところうくふ鉢植なしして賞翫ことのほかなりしとぞ




金玉山雙林寺
本堂
西行上人往生の双林寺といふ所にてよめる


東大谷
祖廟
拝所
茶所
寄進所

金玉山雙林寺は高臺寺の北にあり古は天台宗の別院にして傳教大師の開基なり至徳年中國阿上人移住して時宗と改む本尊は薬師如来にして傳教大師の作なり鎮守は天照太神宮東の丘にあり

西行の庵 西行の塔あり此所に幽居しすみ建久九年二月十六日に入寂しけるとぞ當寺の櫻は西行法師植すひてこれを愛したまふとぞ

性照の塔は平判官康頼入道なり此所に山荘ありて遠流より帰洛の後爰にすみてかの宝物集といふ物語を書れたるなり 康頼浮世にある寶をあつめて辨し真の寶は佛なりと經を引て佛教にかなへしむるの書なりこれなり

頓阿法師塔あり 頓阿は四条道場金蓮寺に住んで後は雙林寺に閑居し寂しけるとぞ 草庵集は此地にて撰しけるとぞ

當寺の院々も風景ありて洛陽東山の勝地なり春秋ともに酣歌の聲間断なし

遊糸都鄙の騒人久敷しきげけ此地に讃嘆をいたしむるまし洛東の佳境なり

大谷は雙林寺の北にあり東本願寺の祖廟なり阿弥陀堂の本尊は安阿弥の作親鸞聖人の廟塔は後の山腹にして墳上に虎石あり石の形虎に似たれば名とす此石そのかみは開山聖人往生の地柳馬場押小路虎石町にあり秀吉公の御時伏見城中に移しあり其後今の地にうつされけるを聖人の御墓をそくし免慶長年中今の境内七条の北にあり 世の人旧地を御墓所と呼ぶ 其より此地に遷して元禄年中に造営あり廟前の荘厳みやびやかに微妙なり 大谷の名義は知恩院にも載るごとく花頂山の此地にも攝家しくさ然生乃旧號をとりて名づくるなり

後は吉水の禅坊をうつせり

東漸寺本住寺は大谷の南より登りて山腹にあり共に日蓮宗にして本能寺の末派なり

真葛原は祇園林のひがし知恩院の南をいふ

祇園女御の旧跡は雙林寺門前の北にあり 東西八間 南北五間 此地を耕せんとすれば祟ありとぞ

東山長樂寺

遊長樂寺

路迷鷲嶺通霊崛
眼渡鴨河望帝城
心在空門齡已老
須辭俗境脫簪纓

藤季經





圓山安養寺
風さつく
真葛原の
夕くれハ
鐘そきこゆる
秋の
やまてら
慈法

東山長楽寺は大谷の北に隣る。むかし開基は伝教大師にして、またも天台の別院なり。当山の致景は唐土の長楽寺に似たりとて新号とす。しかるを後は国阿上人住持して時宗となしぬ。本尊は十一面観音なり。伝教大師唐土より帰朝の折から、海上にわかに龍神姿をあらはし、頭に観音の像を戴て来る。大師の礼拝渇仰あさからざれば、忽化して一の尊像となり、袖に飛来し給ひけり。当寺の本尊是也。台座の下の蟠龍は大師の作にして世の謂なり〔已上縁起〕。弁財天の社あり、これの神躰も大師の制作にして鎮守とし給ふ。傍の庭造は相阿弥の作にして世に名高き勝地なり。

又当山は洛東第一の風景にて、鳳城九陌の大路小路、北は加茂二葉山、大宮森より南は鳩の峯、淀の川瀬もゆたかに舟ゆきかひ、眼中鳥瞰の客とぞなる。

蓮華水は隆寛律師といふ台宗の僧、後には法然上人の弟子となりて専修念仏の行者となり、八十余歳にして寂す。其時池の中より蓮花生じけるとぞ。

安徳天皇の御衣の幢は当寺の什宝也〔御母建礼門院御餝をおろさせ給ふ時御戒師あれ…〕

図山安養寺は長楽寺の北にあり。是も山門の別院にして伝教大師の開基也。本尊の阿弥陀如来は安阿弥の作。建久年中に慈鎮和尚まで住み給ふ。其後時宗となし、国阿上人住職せられし。盲人源照といふ者琵琶の秘曲を奏せしかば天聴に達し、後小松院の恩寵を蒙り紫衣を給ふ。是盲人紫衣の始といふ。源照はじめより当山に祈誓し世に名誉あらん事をねがひ給ふして願を成就せしかば、当寺の本堂を建立し

吉水の井は鎮守弁財天の傍にあり〔慈鎮和尚此地に住給ひし時ゆへに吉水和尚といふ〕。青蓮院宮御代々の法親王灌頂の時此の水を閼伽とし、夜源空に例式の列を乱し来臨し給ひ、御手にぞ汲せらるとなりといふ。

当山坊中の書院は昇らずして高楼に並ぶ。清奇典麗いはん方なし。庭中には名石を畳んで盆景を催し、池を鑿ては西方のかたち、緑樹芳草四季の花を絶さず、躑躅の履の音涼しく、中にも多蔵庵〔眼阿弥の庭は相阿弥の作〕、左阿弥庵、也阿弥の書院の画は雪渓の筆なりとぞ。凡浴場樓の地に多なれど此地に勝るはなし。


知恩教院
一心院
本堂
山門

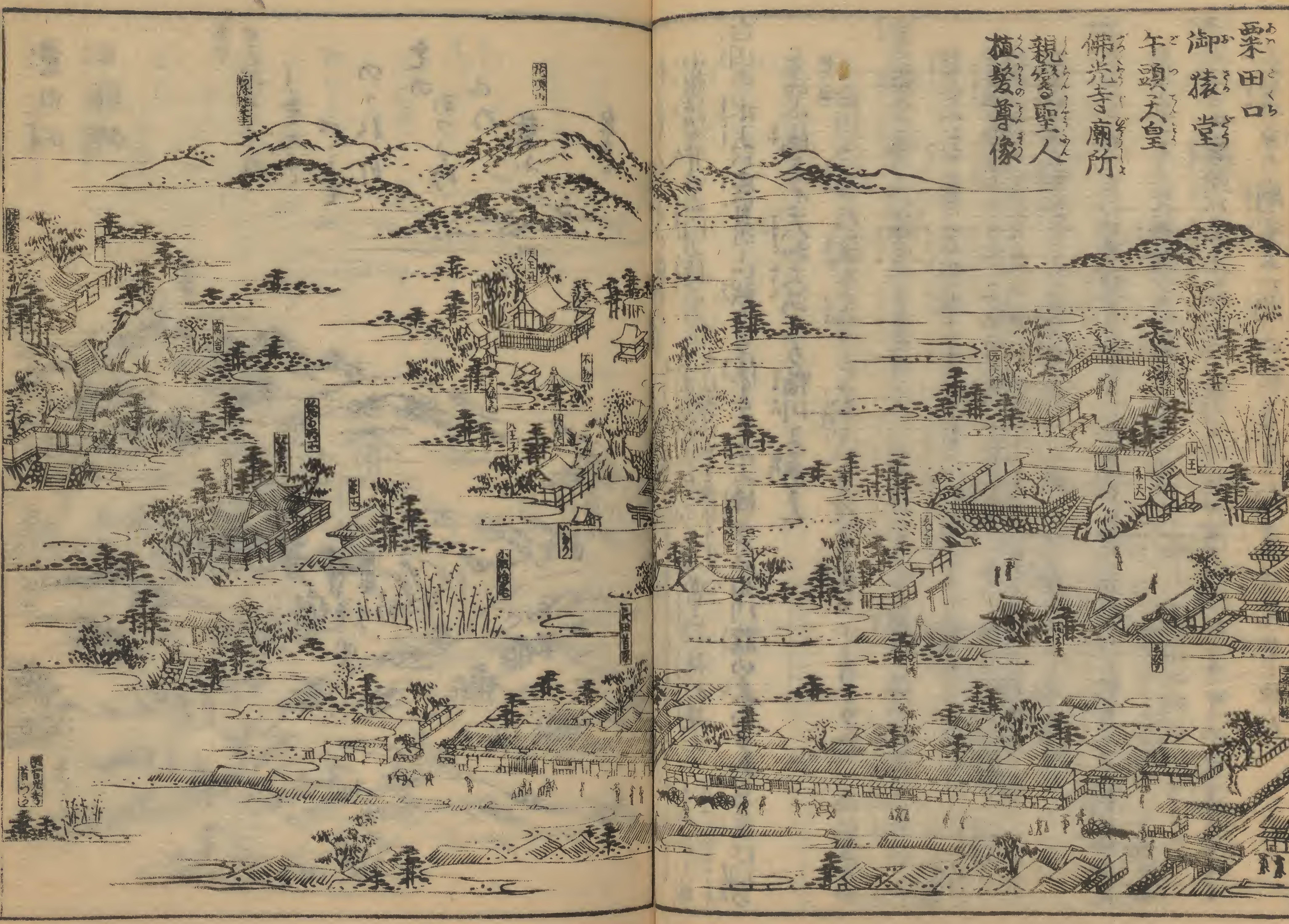
華頂山大谷寺知恩教院ハ浄土宗の惣本寺ニして鎮西流義なり元祖
圓光大師宗風開發の霊地ニして吉水の禅房とハ是なり初ハ東の山坂
今の勢至堂の地ニして大師入寂し給ふ所を（古ハ叡嶽の別院南禅院ニして慈慧大師草創の地なりとぞ）
星霜かさなりて山門十二代の座主青蓮院慈法和尚法然上人の弘法を満誉和尚の代に
随信し給ひ此地を寄附し給ふ昔ハ今の圓山と新坊と一面にして吉水といふ
至って　台命を蒙りて峻岨を穿て平地とし今のごとく伽藍御建営ある
洛陽第一の山門に掲る華頂山の額ハ霊元法皇の宸筆なり本堂大谷寺
大廈なり
の額ハ後奈良院の宸筆とぞ須弥の壇上にハ圓光大師の像を安置在
西の間にハ翠簾を巻上て壇上に　神牌を崇奉る大師の廟塔ハ東の
山上にあり勢至堂に掲る知恩教院の額ハ後柏原院の宸筆也本尊
勢至菩薩ハ安阿弥の作也（満誉上人化人より授与し給ふ像なり）紫雲石ハ勢至堂の側にあり
大師入寂の時聖衆来迎し紫雲水面に靡き異香水気に遺るといふ
一心院ハ其南にありて本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作也
抑元祖大師の傳記を鑑に其先ハ久米南條稲岡の庄之人ハ久米押領使漆



時国母ハ秦氏之子なりしが欲て夫婦諸ともに佛神に祈りて秦氏夢に
剃刀を飲と見て則妊身となり長承二年四月七日午刻男子を誕む時紫雲
空にたなびき白幡二流降くだりて館の西なる椋の木に止り鈴鐸四方にひゞきた
紋彩日にかゞやき七夜を経て天に登る是より此樹を誕生椋と号す後に佛
閣を建て誕生寺と號して今にあり赤子の字を勢至と号け侍るに幼きより
の器なり叡智にしてやゝもすれば西の壁に向ふの癖あり九歳にして時国の菩提
るの室に入て学問を悦び玉ふ観覚とて人倩小児の量を観るに是只人にあらざれ
徒に邊鄙の塵に住しめんは惜むべしとて比叡山西塔に北谷持宝坊源光がもとに登せ
に初学の書簡に日進上大聖文殊一體とある時ハ久安三年二月十三日入洛して
初学の書を持宝坊にて源光に披見して文殊の像なりしかば小児のこと
上洛せしよし使者すなはちいひやる小児の聡明なる所智せり則十五日に登山し
源光試にまづ四教義を授けれ義をさして不審をなし疑ふ所なき天台の要論
[illegible]

月八日小児を相具して功徳院の阿闍梨皇円のもとへ入室せしむ皇円真にちれをとくれ
ば我聞て驚て曰去る夜の夢に満月室に入とみえしが果て此人に逢へき前兆なり
とて悦喜しぬ同年十一月に髪を剃戒壇院にして大乗戒をうけられ断ぐ恵
解天然にして四教五時の廃立明らかにわかち一心三観の妙理玉をみがく所立の義師
の教に越えたり阿闍梨感して曰学道をはげみ大業をとげ天台の棟梁となるべしと
なげくをいさむれ共更に名利の学業なきとて忽師席を辞して久安六年九月
十二日十八歳にして西塔黒谷の慈眼房叡空のもとに行て我幼稚より隠遁の
志深かりしかば偏に出離の心をおこせり是法然道理の聖なりと
感じて法然房と号し実名は源光の源と叡空の空とを摘んで源空と號す黒谷に
蟄居ありし出要を求るの心節なれども今の道なり生死を離るべきと一切経を
披見せらるゝ事五遍なりけりされど諸の経論につきてはふかく思惟せられけれども
なほも高し遂に恵心の往生要集并善導和尚の釋義を深く指南とせり
かの釋義は乱想の凡夫称名の行によりて順次に浄土に生るべき宗旨を判せり蔵経

彼此の次に呈を窺ふ事二十遍に逐に直ハ釋義に一心専念弥陀名號行住坐臥不問
時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故之文に至りて末世の凡夫弥陀
の名号を念ぜハ彼佛の願に叶ふして往生浄土疑ひなしとさとり伏して承安
五年の春四十三歳にして餘行を捨て修念佛に帰入せりこれ法然上人の宗
風尾に弘まりしが山門の悪徒これを破せんとし或ハ大原において問答ありしかとも
皆念佛の理に歸伏せり建久二年の春ハ後鳥羽院の逆鱗にふれて四国に左遷
せられしかども承元元年十二月に勅許を蒙り帰京して東山大谷に閑栖し給ふ（今の当山）
のほとりなり遂に建暦二年正月廿五日午の刻法壽八十歳にて遷化し給ふ今年より[illegible]正月十
九日より七日の間大法會あり勅命に依て御忌と称し毎年の始の導師ハ[illegible]
を招蘭麝の香ハ布金に満て法筵の中日にハ知恩院宮法親王御焼香あり寺
務の大僧正を始末派の衆僧大會の坐頭を出し[illegible]師の分野を此不遠に極楽
浄土を[illegible]大師の厚徳顯然たりし證なりとぞ　洛陽の貴賤袖をつらねそをのめく群集する[illegible]
[illegible]
親鸞聖人廟塔の遺跡あり　[illegible]
小鍛冶が井ハ山門の傍にあり　三条宗近名剣をうちし時当山の水を用ひしと[illegible]世に名高し
白川の水上ハ志賀の山越より流れて東三條にそれハ白川橋の名あり知恩院の門前
を西に流れて大和大路より鴨川に落る
新千載
白川の絶ぬ流を為して萬代ちぎる友ちどりかな　法親王覚助
東三條金蔵寺御猿堂ハ青蓮院御門跡の院内なり三猿の像ハ傳教大師の作
當寺の本尊ハ本地蔵と号し傳教大師唐土より将来し給ふ[illegible]
[illegible]の像は崇敬する事年あり[illegible]
[illegible]中にあらんかへり故に永く貧窮をまぬかるゝ[illegible]
尊勝院ハ南の丘にあり本尊ハ元三大師の坐像にして自作なり
粟田天王やしろハ御猿堂の東にあり本殿ハ感神院新宮なり例祭ハ九
月十五日にして神輿一基鉾十五本あり　白川の細き橋を[illegible]曲[illegible]
佛光寺の廟所ハ天王社の東に隣る阿弥陀堂ハ明和年中の再建にして
[illegible]廟堂の内ハ開山親鸞聖人の畫像を安置す

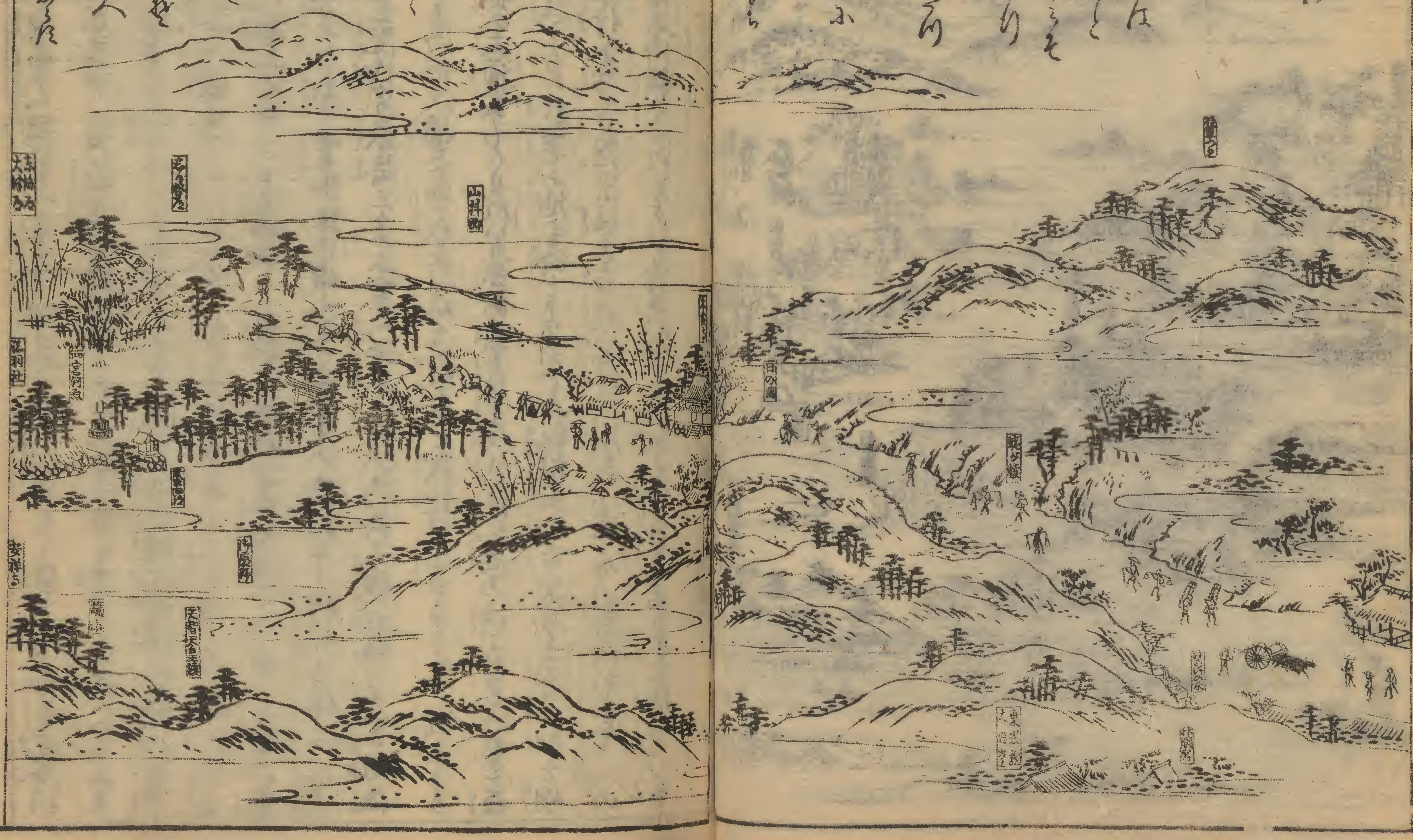


粟田口
御猿堂
午頭天皇
佛光寺廟所
親鸞聖人
植髪尊像

粟田山（あはたやま）
日岡峠（ひのをかとうげ）

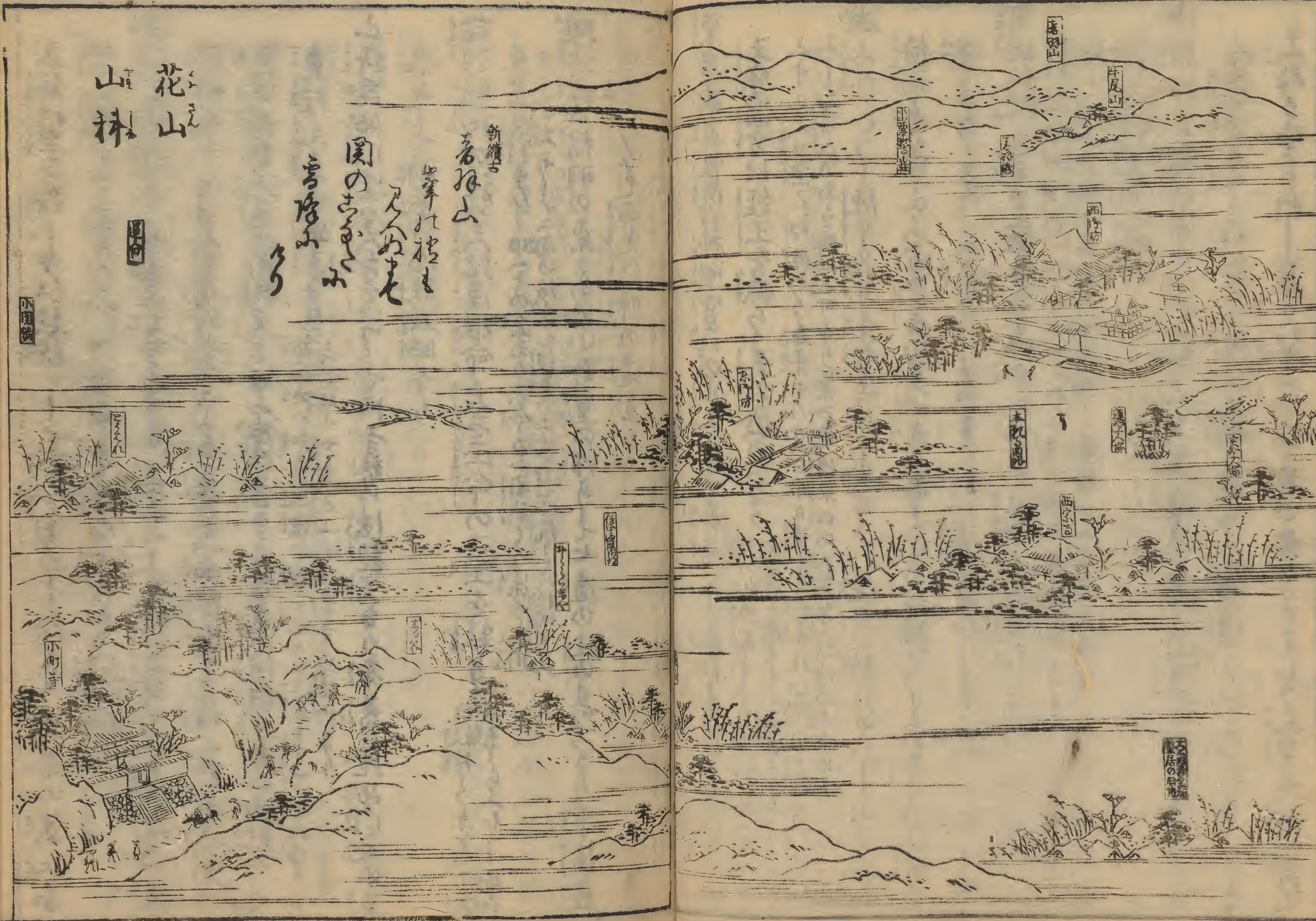
古今
うれしきは
よそめにも
ぬれそ
のかわり
その
あふさか
山の
葉に
よみ人しらず

夫木
東路と
もりしは
都の
山
人くりかえて
君をまつ
都の人
読人しらず



華頂山親鸞聖人植髪の尊像ハ佛光寺の廟所の東に隣る舊青蓮院御門
跡の院内に在せし故近年此地を去りて堂舎を遷し華頂山御堂
と称す宗旨ハ天台にして親鸞宗義を摂く正信偈文念佛和讃御文章
等の勤行あり本尊ハ阿弥陀佛の坐像を安置し石の壇上の厨子に此聖
影を安す長三尺にして立像なり小葵の直衣に紅梅の御衣を召紫の糸
甲掛の指貫を着し雲繝縁の席に坐て児童の御影なり抑此聖像ハ人皇
八十代高倉院御宇承安三年に聖人誕生ありし御父ハ大織冠鎌足公の苗孫
有範卿と申し御母ハ八幡太郎義家の嫡子対馬守義親の息女なり聖人幼年より
出離遁世の志頻ましましけれハ九歳の春青蓮院慈鎮和尚の許に詣て髪を薙
のひ御弟子となり範宴少納言卿と申されて叡嶽無動寺にて天台止観を明
然遂に難行を捨て易行に趣き本願念佛の一流を弘通ありし慈鎮和尚聖人の
剃髪ありし御髪をうけられしをかの筆に髪を御頭に插並せられ是を植髪といへる

[illegible]號し宗門跡御所[illegible]
栗田神明宮ハ清和天皇御宇貞観年中に勧請しありしとなん [illegible]
東山石蔵真性院ハ神明宮尤の山上にあり本尊ハ十一面観音[illegible]
王城の四方に経王を蔵らる其石蔵の一なり 初めハ伽藍巌をくり応仁の乱に回禄して
山中に大日堂不動堂あり毎歳六月廿八日廿日諸人群参す 今纔に遺りて小堂あり 此所ハ安井御門跡の御領
よりて当山の土を陶工に可とす粟田焼清水坂の土器等此地の土を用ゆ
蹴上水ハむかし源牛若丸金売吉次に具せられし陸奥へ下り給ひし時平家の
侍関原与市といふ者牛若の馬に水を蹴かけしかハ牛若丸怒りて与市を
抜て与市をきらしめ郎等も数多く伐捨通りのものしらしめ名づけ給ふとぞ
日岡の峠より三町斗西に四面山にして其中に往還あり往来の旅人
千本松毘沙門堂ハ街道の北にあり亦の梅香庵ハ木食上人
住して坂路を造て牛馬の労を助く量救水ハ石瓶の色の口より
後人其湯を止むといふ
碑の銘楷ある所にあり
御廟野ハ日岡の東をいふ天智天皇の御廟なりむかしハ此辺まで陵墓の
人馬駕籠ハ下り物故通りける里ちく諸の侯も只恐れ多くしてそ
上りける山よりしぬ世に一人十陵の其一なり天智天皇御馬に召れて


花山
山林
音羽山
牛尾山
小町寺
西宗寺

山科の里を籠しめひ息絶して登天ありし所なり御首の落止る所に陵を築く則御首石とて陵の南にあり 天皇の御首此石の上に落しとぞ

吉祥山安祥寺ハ御廟の東にあり真言宗にして紀州高野山宝性院乃兼帯所なり俗呼んで高野堂といふ本尊ハ十一面観音なり傍に地蔵堂あり恵運僧都入唐の時将来しける地蔵なり当寺ハ染殿皇后の御願にて貞観元年の建立なり 初めの地ハ如意山麓の谷にあり其後長承中今の地に移す故に如意山とも当寺の境内なり

山科毘沙門堂ハ天台宗にして御寺務ハ法親王なり本尊ハ毘沙門天の立像にして開基ハ伝教大師なり

諸羽明神の社ハ天児屋根命天太玉命の二坐を鎮座す 此社地より東を四の宮といふ 延喜式 第四の宮住給ひしゆへ其の名あり又今の小関越より流るゝ小川古ハ広大にして一面の河原也往還の土橋之下流るそれハ柳川と云

廻地蔵ハ諸羽の東にあり小野篁の作にして七道の辻の其一つなり平清盛の命ありて西光法師の建立なり

音羽山 ハ牛尾山ともいふ 巡分より東南の山なり音羽里小山村ハ道のほとり [illegible] ありて此山の山川あり是を音羽川といふ麓ハ山科音羽郷にして古より和歌多し 音羽ハ延暦の頃高水寺殿三品花瀬といふ官女の此流に山荘あり今西本願寺の別荘あり て牛尾観音堂に登る道に安履石あり 行叡居士の沓此石にありしといふ 弘法腰掛石 鮎床滝 瀬子滝音羽滝を語の右にあり仙人窟五丈巌左の嶺を登る事二四丁ばかりあり此の瀧ハ陰語の左にありて経石ハ其の右にあり

新後撰 音羽山花咲ぬらし逢坂の関のこなたに匂ふ春風 宗尊親王

続後拾 名にしれは松吹風の音羽川わたらも涼し山乃下かけ 後西園寺入道

拾遺 音羽川青けの波も岩越て関のこなたに秋ハきにけり 定家

続古 時雨のゝ音羽の里ハ近けれと都の人ハおとつれもなし 前右大臣

牛尾山法厳寺ハ七曲の上にあり真言宗にして本尊ハ十一面観音 天智天皇の御作 開基ハ行叡居士延鎮法師の像 [illegible] 帝の社 神明社あり 不動毘沙門天ハ行叡居士延鎮法師の像 智証大師此両品を以て模写しゆへとぞ

當寺ハむかし延鎮法師音羽川の水上に於て行叡居士の旨を給ひ大悲の化現ある

るを感得せる霊場也（洛陽清水寺の開祖なり 古ハ御本尊を安置す）故に清水寺の奥院と称しける

山科本願寺の旧地ハ花山の麓にあり第八代蓮如上人文明年中の草立也

實ハ如證如三代住職しおいて宗風繁栄して堂舎甍をならぶ遂に佐々木定

頼が為に囲撓まるに及ぶ（拾遺に云ふあり）其後信長死今山科御坊と称して東西本願寺の懸所二ケ寺あり

（明応八年三月廿五日蓮如上人の遷化也）蓮如上人の塚ハ旧地の西にあり實如上人の塚ハ東の野村東二町ばかり

花山ハ澤谷峠の東にあり元慶寺ハむかし僧正遍照住せし所にして天台宗なり

本尊ハ薬師如来則遍照の作也人皇六十五代の帝花山帝ここに入らせ給ひて御落飾し

給ふこれを花山院といひけるなり

花山にて侍りけるに僧正遍照が室にて秋の歌のよみ侍りけるに

續古　あるじなき住家をとへば梅の花いまもむかしの春や恋しき　津守国基

苦集滅道といふハ今の澤谷越をいふ小町寺玉章地蔵尊ハ名字の由来をいふ



南禅寺門内
金地院


南禅寺
神仙佳境
南禅院

瑞龍山太平興国南禅禅寺は東山之際のほとりにあり旧 亀山法皇の皇居なりしを
開山大明国師に賜て五山之上の号を蒙る当山の記に曰 太上皇亀山
院弘安年中に此地に離宮をいとなみたまふ正応のころ宮中にあやし
き事ありて嬪妃たちをなやます陰陽頭に占はしむるに卜巫しるしなし故
寂勝光院僧正道智なるもの此地に棲む世に駒の僧正と称す其霊のなりて
当山に秘惜して障碍をなしけり故に顕密の諸師呪術巫祝に及ぶ
また百計をなし拱く同四年東福の釈普門〔当寺の開山なり無関と号す諡は大明国師〕勅命を請て
二十の禅侶を率て宮中に安居し只ひたすら観をなし坐禅しけれは
物怪跡を匿し上下安穏なり上皇崇感のあまり普門を礼して伽梨衣
をうけたまひ又宮をあらためて寺となしたまふ〔上皇は上の宮に安居しのち下の宮をまして寺となしたまふ今の龍淵〕
室をうつし上檀の鳴滝の画は古法眼〔元信〕水呑の虎は探幽にて世に名高し遂に命ありて仏殿を創建しぬ
釈迦仏の坐像脇士は文殊普賢なり又金剛力士の二体を安置す
此力士の霊像は凶禍のしるしをなすといふ 南の檀には亀山上皇の神牌を安置す
像は達磨百丈臨済の像を安置す仏殿に墨華堂といふ額あり山門は五鳳楼と
号して寛永年中藤堂高虎の再建なり〔楼上には羅漢の像多く唐本の画を用ひて是を模す〕唐本の
白檀二株山門の前にあり石の大燈籠一基山門の外にあり高さ丈余
石は白川の産にして希代の大燈籠なり蓋石の寛さ二つに割龍の紋あり
又地輪の上に文字あり〔南禅寺山門石燈籠寄進 寛永五年九月十五日 佐久間大膳亮平勝之 寄進之為現当二世安楽〕猿戸明神
峯龍池の乾にあり是当山の鎮守なり〔むかし行実の通衛に猿戸明神とあがめ是は後宇多帝の牛飼の舎人なりしとぞ〕
あり主人此所にて小祠を建り寛永年中に〔以英僧和尚大祠を造りて山門の境致とせしとぞ〕南禅院は亀山法皇の最初の叡感
安置す金地院は御宮ありて白砂に鳳凰竹を植る楼門左右に随身あり
像を安置す当院の開祖は大業和尚五山僧録司の号を蒙る駒の僧正の霊
独秀峯にあり大僧正道智常に此瀑布を愛して滅後に霊をとゞめて
当寺の護法神となし社を瀑布の側に建て祀る神仙佳境といふ〔額は光明〕
寺入道前摂政道家卿の息なり三井寺長吏禅林寺にして又獅の僧正ともいふ 蔵春峡 聖雷橋といふは瀑布の辺にあり
羊角嶺は天授院の東の峰をいふなり


永観堂
玄関
方丈
本堂



聖衆来迎山禅林寺永観堂は南禅寺北の隣にあり浄土宗にして西山流之本堂の阿弥陀如来を願本尊と號す長二尺余の立像なり當るは舊清和天皇の勅願所として真紹僧都は草創之又中興の開基永観律師永保二年二月十五日晨朝衆僧とゝもに行道の念佛讃をなしけるに信感にたへずして乾の方にむきてしばらく躊躇せり本尊壇をくだり給ひて永観おそしと顧命しめ給ふ律師感涙を流し是ぞ末世乃衆生を摂取引接の證なりとて自ら其の由縁を記されしより（今の當寺にあり律師は花山院の皇子深観僧都の弟子なり南都東大寺の勧進職に補せらるゝ事四十二歳おもしろくて此地に閑居しそのゝち浄土を願ひて往生十因等の書を著せり）祖師堂には善導大師（自作）なり圓光大師西山上人の三影を安置す（當山はむかし真言宗なり此大納言頼盛卿の息静遍此所に住して深空の滅後撰択集を披閲して一向専修の義をたてところ深く浄土に帰依しゆひて成蓮房の為に法然上人を請じ深遍頼卿経蔵の額法海の二字は英隆高泉の筆なり）聖衆来迎の松は堂前にあり夜四方に異香薫じ音楽聞へて菩薩来集の旋ひし此松の枝にありしとぞ

山号は此謂中門の左に法化の学校あり今も下に旅尺（源常寺は堂主廢す）

正東山若王子は永観堂の北に隣す。天台宗にして修験道を兼帯す。聖護院に属す。本社は熊野三所権現、宮は後白河法皇の勅請にて、傍に若一王子を鎮座す。観音堂は那智山の本地十一面観世音を安置す。傍に洛陽七観音の其一也。南は山下に滝あり（那智の滝をうつして当山の名所なり。[illegible]）

霊芝山光雲寺は若王子の北に隣る。禅宗にして南禅寺に属す。[illegible]英仲和尚の再興也。仏殿の本尊は釈迦仏を安置す。此地より初め霊芝を生じて光明を空に映しける故、北の額あり。霊場なりとて、御盛なりし東福門院より当寺を御建営ありしとぞ。瑪瑙石の手洗鉢は仏殿の後にあり。当田寺の奇観なり。

鹿ヶ谷は霊鑑寺御殿の前を東へ行く。談合谷は其辺なり。一町斗にあり。むかし俊寛僧都の山荘あり（新大納言成親、平判官康頼等、此所に会合し平家を滅さんと陰謀を企しなり）。如意嶽は東北の峯にして、楼門滝は大木の古松四五本の下にあり。鹿谷より八町、滝の高さ一丈余ありて、春の長雨の後には水増て近隣に聞ゆ。此嶽は東に続て白毫の峰を埋み谷深して、方丈の背嶽路を遥かに北に近く見坂山険路多く、常に人跡稀なり。



霊芝山光雲寺

住蓮山安楽寺



住蓮山安楽寺ハ鹿谷にあり本尊ハ阿弥陀佛の坐像にして恵心の作なり脇士ハ觀音勢至を安座にて共に運慶の作なりとぞ當寺ハ法然上人如法念佛を修し給ふ地なり徒弟住蓮安楽の二僧に附属し給ふ後鳥羽院の愛妃松虫鈴虫の二婦ハ両僧の勧に入忍んで出家来り尼となる　上皇大に逆鱗ありて二人の僧を刑し法然上人を四国に左遷す其後年経て念仏弘法の回向ありけるに赦し住蓮安楽の二師を開山として恵心の作開基

善気山万無寺ハ同所にあり本尊ハ阿弥陀佛の坐像にして恵心の作開基万無心上人古ハ法然上人艸庵の営ある修念佛を修し給ふ旧蹟の故に法然院とも號す本堂のまへに銅像の地藏尊を安座にて客殿の庭に霊水あり銘を若狭水といふ此地ハ松風蕭然として一つの鉦の声六時禮讃の聲ハ幽谷に谺し寂寥として峯の月ひかりなり盧山の白蓮社もかくやとぞ清浄无塵の佛界なり　世より六字修の念佛を鹿ケ谷流といへは此寺の称名を專とするなり

鹿ヶ谷法然院




黒谷
金戒光明寺
本堂
方丈

紫雲山金戒光明寺黒谷ハ浄土鎮西四ヶの一本寺なり元祖圓光大師の
旧蹟にして叡山西塔の黒谷をうつして新黒谷と称す本尊ハ元祖
大師の像なり安置す勝境の厨子にハ親鸞聖人の像あり並ニ自
作なり阿弥陀堂の本尊ハ恵心の作なり観音堂の本尊ハ行基の
作にして千手の像を安置す 洛陽観音巡りの其一 勢至堂ハ法然上人の廟塔なり
則勢至菩薩の化現なれバの 廟之上堂座の下に五輪の石塔あり
熊谷堂にハ蓮生法師自作の像なり又敦盛の画像を
安置す三重塔の文殊菩薩ハ日本三文殊の其一なり 丹後切戸 和州安倍
優塡王善財童子等の四像を安置す 世に天照春日八幡住吉の神像なりといふ又大に形えん 脇士ハ維摩居士 優波利尊者
開發の時此ふなり紫雲たなびき異香薫じけるとぞ 紫雲石ハ塔の下にあり 元祖大師一宗
掛松ハ熊谷次郎直實上人の教に帰入し着せし鎧をかけ池にてすゝぎし松 紫雲山の號ハ此瑞によりてなり 鎧池 鎧
に懸し也 蓮生法師ハ建久二年九月十四日往生をとげし諸方へ自身... 念佛
蓮生法師ハ法然の道俗を集め高聲に念佛し共に西に向ひ元祖大師の龍宮の神勅によりて浄
ともに袈裟衣たゞしくうけ西に向ひ
真目の未刻ばかりをうけたまはりしとなん
まぼろしの西文を書し

鈴聲山真正極楽寺真如堂ハ天台宗にして開基ハ戒算上人なり本尊ハ阿弥陀佛
の立像長三尺三寸慈覚大師の作なり抑此尊像ハ江州志賀郡苗鹿明神の神
木を大師得給ひ此木夜毎に光明を放怪く割ば有佛形鮮にあり故に此尊像を
彫刻とぞ承和五年に大師入唐ありて天台五臺山にして顕密の奥儀を究め給ふ乃
弥陀經を傳て同十四年に帰朝せり然ながの引聲の一曲を失念ありしに西方より飛
來り小舟の帆に小像の弥陀香煙に立て成就如是功徳荘厳と唱ふ大師感
涙を止て加持し給ひ帰朝まで胎中に納め大師在世の間ハ叡山常行堂に安
座し其後永観二年の春戒算上人に告て聚洛に出て一切衆生を利益せん
霊夢あまた有て東三條の地藏堂に出ましまし其夜の告に神楽岡に擔ひ奉りし所
有縁の地なりとて此處に遷し奉りしを後白川女院の離宮と又同夜女院にも告
ありし此先文中に遷し正暦三年秋宣下ありて伽藍を建立ありて
後に元禄五年に京極今出川より此地に遷座ましまけり 今の本堂ハ 如堂の地をも下す所
應仁の乱田中里の後安土に同年... 念佛を申さぞ念往の時にもあり此時礼堂の眺めハ内陣より
此を五十七日にて法然をそだへに五劫思惟にたがうなへざとも

真如堂如来


真如堂
本堂



神楽岡
吉田社
新續古今
兼熙
内宮
外宮
本社

吉田宮斎場所は神楽岡にあり 神代の昔天照太神天の岩戸に入給ひし時八百万の神達集つて神楽を奏せし其所なりといふより号すとぞ
當社は清和天皇の御宇貞観二年中納言山蔭卿の勧請又一説には卜部兼延の造立ともいふ 日本紀の撰者なり 楼門の額は日本最上両太神宮中門の額は日本
最上神祇斎場とあり共に清水谷實秋卿の筆なり 後本殿太元宮の額は
日本神祇三千一百三十二座を鎮座し奉る日本最上日高日宮の額は後陽成
院の震筆之太元宮の額は後土御門院の震筆日本國中三千餘座天神地
祇八百萬神也額は清水谷實秋卿の筆之八神殿の額は後土御門院乃
震筆也此社は大内裏の時神祇官にありて八州守護の験神なり故に宗源の
外の太神宮は八神殿の左右にあり日本国中の神祇は本殿の両脇にある
ぞそのほか其名を[illegible]神社の数を記す春日の社は西の麓にあり是も山蔭卿の勧請
なり 其外桜社等ありとぞ委しく画図に見へたり 明星水はむかし弘法大師所望ありしとなり龍沢は
云日社の傍にあり日陰坂は龍沢ちかし本殿の[illegible]の道なり新長谷寺の観音は
洛陽三十三所の其一なり[illegible]霊寿神といふ智福院は虚空蔵菩薩を安置す
當所は一面の岡山にして[illegible][illegible]の山[illegible]咲乱れて[illegible]
[illegible]の[illegible]の錦とも[illegible]

長徳山知恩寺百萬遍は浄土鎮西四ヶの一本寺なり古は加茂の神宮寺にし
て慈覚大師の草創なり法然上人暫く下上依て尊信ありて感應をひらき一宗を
弘通しありしより加茂の神宮寺を改め念仏の道場とし徒弟勢観房源智上人
に附属し給ふ 源智上人は當寺の二世にして備中守師盛の男なり無双の智者といひ伝ふ 後醍醐天皇の御宇元弘年
中に疫癘流行て死する者の数をしらず帝是を憐み給ひて諸の祈祷あり
といへども更に験なし時に當寺の八世善阿上人に勅命ありて是を祈らせ
給ふ善阿参内して更に念仏する事一七日の間念仏を唱ること一百万遍に及ぶ疫
病忽ち退て天下安堵に帰す 此時修する所の大珠数今にあり 帝大に叡感ありて號を百万遍と賜ふ
此時弘法大師の筆の利剣の名号を當寺の什宝とす 本堂には元祖大師の像を安置す本師堂の釈迦如来
は慈覚大師の作也鎮守は賀茂の神宮也 毎年[illegible]當寺に於ても法楽の神事あり 堂前に碑あり
建久年中に小松内府重盛宋朝へ黄金を送る其志を感じて育王山の龍
興寺より阿弥陀経を贈る 今筑前国[illegible]其形を模写して之一心不乱の下廿一字の[illegible]


長徳山知恩寺
百萬遍
玄関
客殿
方丈
本堂
地蔵

慈照寺ハ鹿ケ谷の北にあり一名銀閣寺とも称し禅宗にして夢窓
国師を開祖とす原此地ハ足利八代の将軍義政公文明十二年に
世務を譲りて閑居し給ふ別荘なり故に東山殿と號す 延徳十二年正月七日に
薨じ給ひて慈照院殿喜山公と法名し
遺命によりて此所を寺とし給ふ
東求堂ハ義政公の持佛堂にして観世音を本尊とし又慈照院乃
像を安置し西のかた上壇にかかる水引ハ濃紫に印金なり古渡にし
て世に稀なる奇物なり若松の画ハ相阿弥の筆剝落あるハ永納の画之
茶湯の間ハ四畳半にして東山殿の物数寄なり茶亭四畳半の濫觴
とす高貴の賓客常に集会ありて茶の湯を楽しミ和漢の奇器を
翫び給ひしを後世に伝りて時代物といふ
二重の高閣あり上を心空殿下を潮音閣といふ 北山鹿園寺の金閣に準じて之を銀閣と號す
鎮守八幡宮ハ護国廟とす閣のまへに橋ありて分界橋迎仙橋
擢錦橋臥雲橋といへり其のほとりに飛泉あり洗月泉と號し流下の橋

を龍背橋といふ仙袖橋仙桂橋ハ東求堂のまへにあり落照岡にて
躑躅が植られて夕陽を止む向月台銀沙灘にハ白沙を浦らへ落
月を惜む細川石。山名石ハ官領職の献にして其英名ハ後
世に朽ざる浮石坐禅石ハ池中にありて淡路山の傍あり龍蟠
石。蹲虎石。臥牛石。伏虎石。點頭石。布袋石。天柱峯。回雁峯。香爐
峯なと其石の形によりて号ある之北斗石落星石寿星石濯纓石
謝公塢ハ故事を以て名とす其外大内石。爛柯石。釣月台。仙人洲。白
鶴嶋。臨湖台。仙草壇ありむかしハ此所月まちといへる称此庭ハ
東山殿の御として茶道相阿弥台命を蒙りて造しむる庭中の
風光真妙にして山水の法式をそなへ四時の壮観足らざるといふ事
なし末代庭造の軌範とするに洞庭西湖も掌に握り松島象
潟も目前にうつして壺中に山川を縮め一粒の粟中に日月を
蔵しむる神仙の術ありとぞ見えにける


銀閣寺
ぎんかくじ
我庵ハ
月まつ
山の
麓にて
かたふく庭の
かけをしそ
思ふ
慈照院義政公
月待山
客殿
東求堂
細川
心空殿
潮音閣
玄関

毎年七月十六日の
夕暮大文字はともる此山ハ
銀閣寺の後山如意か嶽に在
むかし此麓に浄土寺といふ
天台の伽藍あり本尊阿弥陀仏ハ
一とせ回禄の時此峯に飛去り
光明を放ちたまふ是を慕ひて
本尊を安置の地へ安座し
夫より千国盆会に光
明のかたちを作り火を点
やうやく後真後弘法
大師大文字にあらため
其後星霜累りて文字
の形も廃しハ東山殿
相国寺の横川和尚に
命ぜられ元のごとく
作らしめ給ふ大の字
初画の一点長さ
九十一間ありといふ
銀閣寺の見し

此文字路に寺の
法的て法城の
眺とまる末代
畫の大文字
とぞいひ
侍る



北白川は銀閣寺の北にあり里の名にして川も民家の中を西へ流る
是すなはち名所の白川の其一なり

後拾　東路の人にとはばや白河の関にもかくや花は匂ふと　民部卿長家

詞花　白川の春の梢を見渡せば松こそ花の絶間なりけれ　俊頼

新後撰　秋の夜の月も猶こそ流れけれ世にかくれぬ白川の水　為教

此里は洛より近江の志賀坂本への往還なり志賀の山越といふ素性法師が君が代までの名にこそありけれと詠ける白川の瀧は道の傍にありて引出(?)にありて谷の水落る淅瀝として涼しく流るめては右手にして流れもいとと清くすさまじく皎潔たる月の影閑しく橋のかかりに牛石といふあり形は牛に似たり是よりして山中の里あり比叡の無動寺へゆく此村をすぎまれ細道より北に入るかたのうへの一家まれ川みる[illegible]

みよしのの[illegible]

古今　志賀の山越にて石井のもとにてものいひける人の別れける折によめる
むすぶ手の雫ににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな　貫之

志賀の山越にて

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり　春道列樹

同

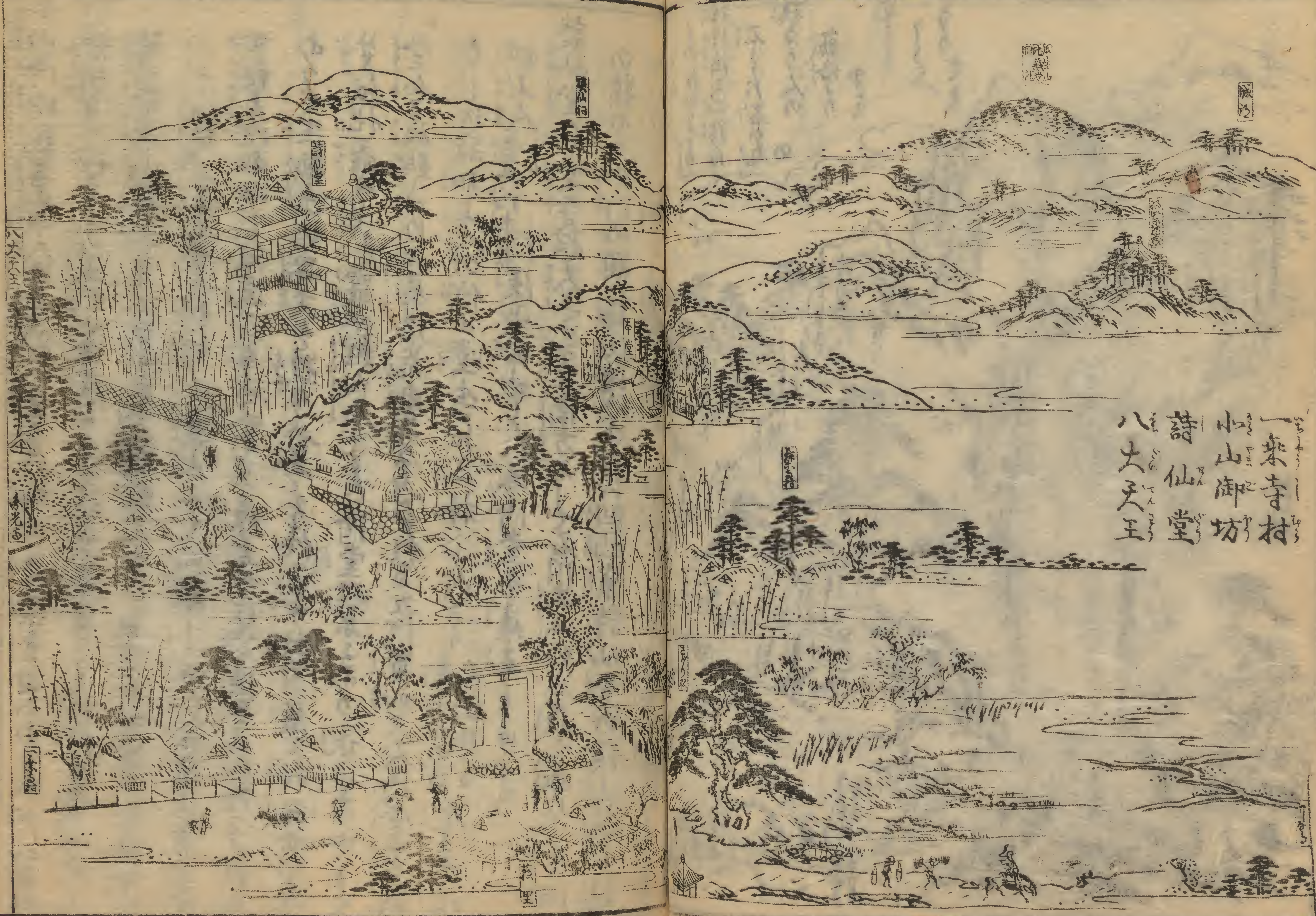
山中村は白川の里より二里半東にして山城近江の堺なり其の後長等の山桜と詠しは此峯はるかに三井寺の入相の鐘は志賀のうら風に誘はれ琵琶湖の風景一眼の中に尽て地勢穏かにして知床(?)奈良にに似たり

千菜山光福寺は百万遍の北にあり豊臣秀吉公に干菜を多く献じより山号を賜る　俗に干菜寺といふなり　又六斎念仏の本寺にして宥免許あり例年六月廿五日近郷より集りて六斎念仏を執行しけるとぞ

瓜生山将軍地蔵は白川の北にあり原は此山の頂にあり寶暦十二年此地に遷す本尊は石佛の地蔵尊長二尺八寸の像なり　此地は永禄年中城郭にして足利将軍義輝公細川晴元将軍山に籠城のより長亭記に見えたり其頃は此像も城中に安置せしとぞ



小白川
小白川の里人ハ石工を業として常に山に入て石を切出し
其外さまざまのものを作りて商ふ
物理編に云精ハ石の気なり
石ハ石の気の核する人の筋絡の
白川の滝



一乗寺村
小山御坊
詩仙堂
八大天王
詩仙堂
本堂

小山御坊親鸞聖人の舊跡ハ一乗寺村にあり西本願寺の懸所なりむかしハ山門の末院にして諸堂巌重たり境地に霊水あり故に聖水山舞楽寺と號す聖人叡嶽にありし時一宗開發の志願頻にして此所に来り百日別行し霊水にて垢離しのち洛陽六角堂に救世観音にあゆミを運ひ玉ふに夜夢中に聖徳太子此地より顯向ありて生極楽の要文を授け玉ふ是より他力本願の一流を弘め末世の衆生を化益し玉ふ霊水ハ向石と云ふ御堂ハ東にありて永正年中まで堂舎巌然たりしが其後荒廃に及ぶ本願寺九代實如上人御堂草創ありし於寂如上人の代に堂舎并山林へうつさる

聖水山の號近き年法如上人なり

當御門主門跡に命ぜられ再御堂を建立しゆへに今山林に在

詩仙堂ハ一乗寺村天王の森南方にして石川丈山の山荘之裏は小有洞の額あり中門の額ハ梅関踏次の額ハ凹凸窠詩仙堂の額上ハ嘯月樓下ハ躍要四壁には漢晋唐宋の詩人三十六輩の像あり畫は則真人の詩をよミみづから書之画ハ狩野尚信これを畫く故に詩仙堂といふ

左一 蘇武 謝霊運 杜審言 李白 王維 高適 儲光羲 韋應物 韓愈 劉禹錫 李賀 杜牧 寒山
右一 陶潜 鮑照 陳子昂 杜甫 孟浩然 岑參 王昌齢 劉長卿 柳宗元 白居易 盧仝 李商隠 靈澈
林逋 梅堯臣 欧陽修 黄庭堅 陳與義 左十八
邵雍 蘇舜欽 蘇軾 陳師道 曾幾 右十八

丈山の墳ハ詩仙堂の巽の方山上にあり正保二年舞楽寺村の中山に壽壙を築きて頑仙祠と號す

丈山ハ无二の居士にして此竹林に居し誓言て鴨川を渡らずとなり寛文十二年五月廿三日卒す年齢九十歳

天王社ハ一乗寺山下里松の東にあり古ハ舞楽寺のやしろなり又八大天王を崇む末社ハ諏訪八幡宮也此地の氏神にして例祭ハ三月五日なり

赤山の社ハ修学寺村の東山下にあり慈覚大師入唐より帰朝の時明神ハ白羽の矢負ひて船の上に現じ大師守護し給ふ故に神託ありて此所に勧請したり

轉宅の節當社の神札をうけて家に祭れバ鬼門金神の祟なしとぞ神前に遊宮の梵字を三所にかく本地堂ハ地藏菩薩にして慈覚大師の作なり

玉山稲荷社ハ高野村にあり原内裏にありし祠なり享保二年中此地へ移らる所なり


赤山社
王山社
御蔭社

八瀬の里人は
いにしへの
風俗
かはらず
男も
女のごとく
髪を
くるくと結
女も男のごとく
脛をあらはし
胸まへの
くくみを合せ
草鞋の
爪先の細
異なる故あり
粧とかや

氏神天満宮
の鳥井みぎに
弁慶の背競石
とて高さ八尺
くらゐの巌
山西塔よりくらべ
探題ゆくらひ
仕へける
鬼が洞とて八瀬山
里の西の方にあり
昔叡山の悪鬼を
鬼洞にとぢこめ
伝教大師羅山
又禁裏へ酒を献
童子これ洞と称す
しなり



御蔭社ハ叡山の西ニ麓高野川ニ東ニあり下鴨皇太神宮降臨乃地なり故ニ御生所といふ例祭ハ四月中午の日より内裏より勅使ニ而式ニ魏々として氏人ハ騎馬ニて列を正し祭るニハ錦蓋をかざし楯鉾弓等の神具さゝぐ列なるニそて下鴨ニ神幸あり

新勅　かけて祈るそのかミ山ニ山人ともみれをとるかれらせり　雅経

八瀬の里ハ高野の北町ニあり天武帝大友王子と位を諍ひて山城の山へ馳ゆかし時王子の軍兵追かけたりて射かけれハ御背ニ矢中たり此所へて名づけて又八瀬ともいふ　當所ニ竈風呂あり天武帝此矢の疵を癒さしめたまはんとて始しなり　今も竈風呂七八軒ありて何れも竈風呂と名づく竈風呂ハ青松葉を焼て坊舎ニ設ることなり

大原ハ八瀬の北一里ニあり若狭街道にして東西ニ八ツの郷あり　勝林寺村　上野村　大長瀬村　来迎院村　勝林院村　井出村　野村　草生村

新古　日数ふる雪けにまさる炭竈の煙もさびし大原乃里　式子内親王

新勅　大原ハひらの高嶺の近けれバ雪ふるほどを思ひこそやれ　西行

惟喬親王遺迹ハ上野村にあり　塚に墓ありて五輪石塔あり閑居の地ハ御所田といふ今田の字とするなり

西方院　上野村ニあり開基ハ寂忍法師

摂取院　大長瀬村ニあり本尊ハ阿弥陀仏　聖應大師の作開基ハ律住法師

融通寺ハ来迎院村の西ニあり本尊ハ阿弥陀仏の坐像ニして湛慶の作なり開基良忍上人の像あり　當寺ハ融通念仏の開祖ニて天治元年の頃洛陽ニ出て是を弘めたまふ融通とらふハ自他の念仏他の功徳と成り他の功徳も自他不二平等融通を不可思議廣大の善功なりとぞ是を修するニ其功徳又自ニ帰る

魚山来迎院ハ融通寺の東ニ隣る本尊ハ三尊ニして中央ハ薬師仏　右ハ弥陀　左ハ釈迦　開基ハ良忍上人此地ハ叡嶺西塔の北谷ニして昔ハ坊舎一百余字あるしかり魚山と號するハ漢土の天台山の西ニ大原魚山といふ所も天台山のまふもれバ此例ニよりてなづくるとぞ

音無瀧ハ来迎院の東四町ニあり飛泉二丈余ありて翠岩ニ傳ふて南へ落る蒼樹蓊鬱として陰涼なる所ニ徹し毛骨悚然とし人近たらし

小野山のうへより落る瀧の名の音無にのみぬるゝ袖かな　西行


八瀬竈風呂（やせのかまぶろ）
新續古誹諧
大そく
りとん
すゝみ
来られ
屁を
こらへ
ぬる
あつさそ
ありける
清浦

大原　勝林院　来迎院　融通寺　音無の瀧　呂律川



新古今
世をそむくかたハいつくもありぬへし大原山ハ住よかりきや
和泉式部

返し
思ふ事大原山のすみかまハいとゞなげきの数をこそつめ
少将井尼

小野山ハ高尾の後れ山をいふ　むかしハ此所にて炭を焼しゆゑに和哥に炭竈をよめり

拾遺

深山木を朝な夕なにこりつめて寒さをこふる小野の炭焼　好忠

続拾遺

夕されハ声うちそへて松風さむし小野の篠原　建礼門院

呂律川　魚山にて高尾の勝川なり　南にあるを呂川といひ北なるを律川といふ　漢土の魚山に勝川二流あり呂律川といふ其例によるなりとぞ

鉈捨藪　呂川の北にあり　大原問答のとき熊谷蓮生法師鉈を袖に隠して法然上人の対論のとき詰難せんとの用意なりしと師さとりて後弟子となり大に制しければ人ハ鉈を此ところにすてしとなり

世和井水　律川の橋をわたりて石垣のもとにあり　何事も所さかりなり和哥に濁を残す

井手の清水　おやほの志みづ　ひとつは此川にあり

熊谷腰掛石　律川の橋南の流れにあり　蓮生法師此所に腰をかけて法談を聴聞したるなり

梶井宮円融院　梨本房ハ呂の川の北にあり　天台の座主なり　諸門跡の一なり　当院むかしハ東坂本にあり　梶井の号とぞ今に因縁のこる　又船岡山の麓にうつし　近代此地にうつされしとなり

推てしれ祖とん

極楽院　当院にあり　恵心僧都の妹安養尼の庵室の旧跡あり

貴炭翁の墓　うしろの山にあり　古此所にて炭を焼給ひし翁の墳なりとぞ

護法石　当院の門前にあり

魚山勝林寺ハ梶井御殿の北にあり　本尊ハ證拠阿弥陀と号す　坐像長七尺仏工の祖康成の作　当院ハ一條太政大臣雅信公の息寂源法師の草創なり　むかし叡山の僧都覚超同楞厳院遍救といふ有智者のあつまりて此如来のまへに於て仏果の空不空の議論ありけるに　覚超ハ不空とのたまひ遍救ハ空の義を立て　如来相好を現し給ひ中道実相こそ如来の本意なれとのたまひしより世の人證拠弥陀院と称す　又文治二年の秋法然上人と天台座主顕真法印始め諸宗の学徒と一向専修の問答ありける時法然上人の清論ありしかハ本尊光明を放ち給ひしかバ顕真もたちまち念仏の行者となり　則浄泉坊に住し称名念仏絶ることなし

實光坊　勝林院の前にあり　後鳥羽院の御塔ハ坊中にあり

法華常行堂　實光坊の北にあり　本尊ハ聖観音

袈裟掛石　勝林院の西にあり　皇慶法師大原に住し袈裟をかけしとなり



古知谷光明山阿弥陀寺ハ勝林院より十八丁北にありむかしは鷲谷といふ浄土宗にして
本尊阿弥陀仏ハ恵心僧都の作なり当寺の開基弾誓上人ハ尾張
国あまべの里に出生し幼名を弥釈丸と号す九才の時出家し其後国
塚尾の観音に百日参籠し念仏諸行に勤めて霊文をさづかりまた
それより自行のため諸国に居しあるひは国々を経廻し其後洛に至り当寺の
地を通りけるにはるかに洛北のかたに紫雲空に靉靆光明赫々としてあり
所ありこれを慕ひて遂に此所に至り見て有縁の霊地なりとて則ち一
宇の堂舎を建立しけり其時頭に雪をいたゞける老翁阿弥陀仏
一躰を持来り本尊にしたまへと上人にあたへ忽ち形もなくかくれ失せたり当寺の
本尊これなり開山堂には弾誓上人自作の像を安置す 開山上人の存生の有髪の遺
髪あり滅後此像に髪を植る世に植髪の木像といふ

芹生里 大原郷にありむかしより和歌に多く詠ず

大原や芹生の里ハ月のころいかに我身もさそ人のうらん 実家

寂光院ハ草生村にあり弘法大師の開基にして文治の頃建礼門院閑居しおハしまし所なり今に至りて残れる本尊地蔵菩薩ハ聖徳太子の御作なり則門院の御影阿波内侍の像あり庭にハ汀の池汀の桜あ

平家物語　後白河法皇大原御幸の時

池水にみぎハの桜ちりしきて浪の花こそさかりなりけれ　後白河院

此辺の旧跡ハ緑蘿の垣といふ門院の御墳ハ後の山にあり翠黛山といふ不動千尋石　石級の他あり　くわし弘法　鎮守神明宮　うしろの山にあり天の岩戸といふ岩窟あり落合の滝ハ寂光院のおくにあり

○建礼門院と申すハ平相国清盛公の御女にして十五歳にて女御の宣旨を蒙り十六にて后妃のくらひにそなハり廿二の御時皇子御誕生ありて安徳天皇と申奉る平家の一門西海に入水の時やうやく源氏の武士にとられ給ふて都へかへり給ひ初ハ東山の麓吉田の辺に住せ給ひ廿九の御時かしらおろし給ふ名を真如覚と申奉る文治元年長月の末に此寂光院へ入らせおはしけれ

平家物語

思ひきや深山の奥にすまゐして雲井の月をよそに見んとは　建礼門院

此地ハつねに寂寥として人跡まれなれハ洛のうちをきく事もまれなり春ハ軒端の梅色香をなし庭の若草もえいでて夏ハ青柳の糸風にみたれ山家松にかゝれる藤白波のことくにみえ秋ハいつしか物淋しく荻のすゑ葉のそよぐ籬の妻遠くあはれに虫の音も鳴つれつれ冬ハ大原の里の炭竈の煙ひとりたちのほりて法乃声をきけ

汁御[illegible]より此寂光院ハ今もくりて[illegible]


大原寂光院

江文社



朧清水ハ寂光院のかたはらにありむかしより名ある所にして和歌に
詠ざる事数多し此泉ハ湛々として月の影ハ清水にやどりて澄る故に
又月の朧なる夜ハ朧にして清く遠羅法師も此地に幽棲して月を浮まん
大原やしばし寂然法師ハ月をそやどる大原の里とすみけむ
今さらに水の面ようつる出の中にすんだりける

新拾　水草ゐし朧の清水底澄て心に月の影はうかぶや　素意法師

後鳥羽院かくれさせたまひて大原におはしますよし
きこしめしけれど

続古　入月の朧の清水いかにしてつひにすむべき影をとむらん　順徳院

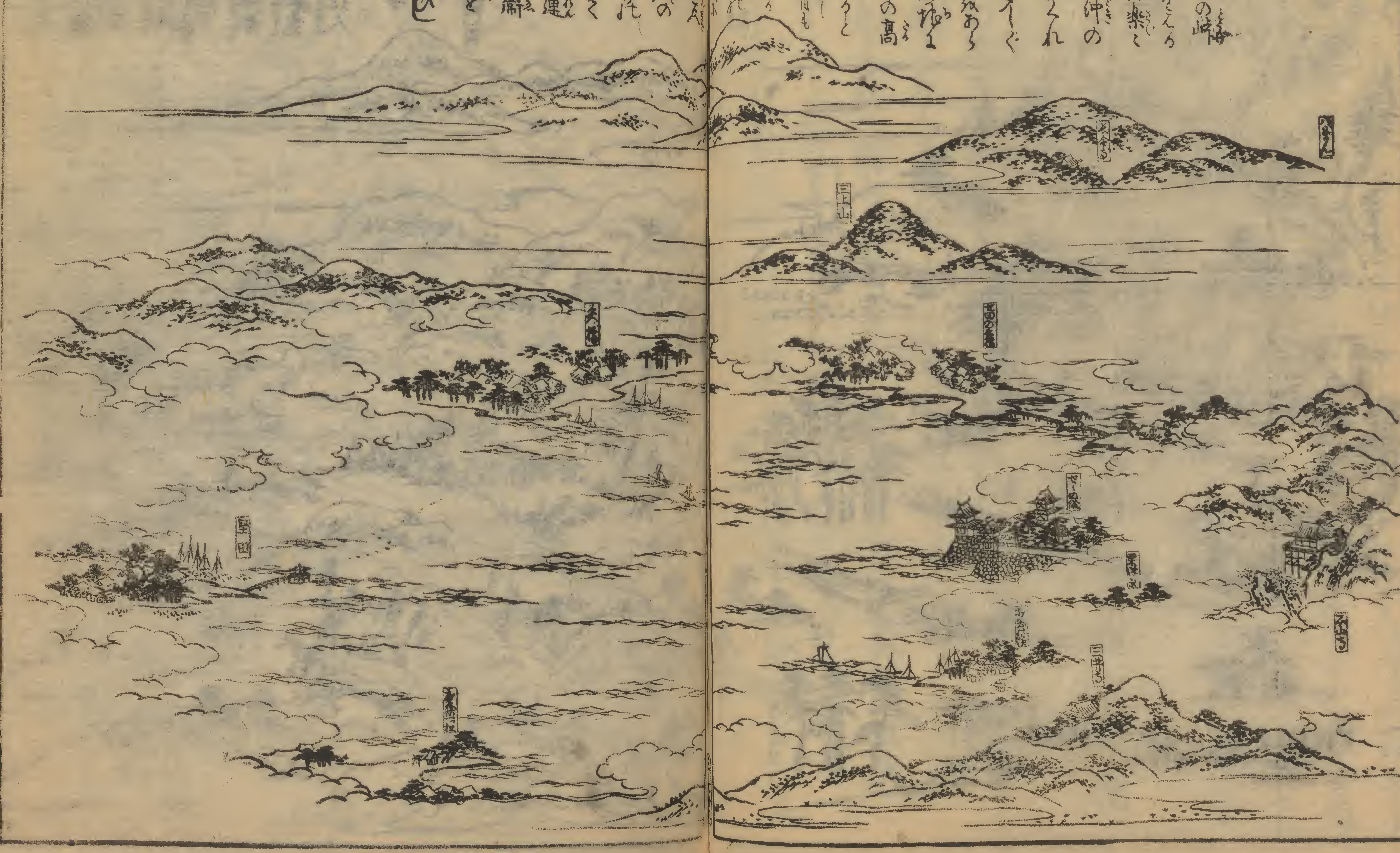
続後　八重葎しげきにむすぼれて朧の清水夜もすみけれど　匡房

新千載　わがこひは朧の清水岩越えてせかれてもなほすみわたる哉　俊頼

ま　すまれふさし朧の里に住まれて見るは清水ぞあらはなりけり　丹後

江文のやしろハ大原井出村にあり大原郷中の氏神にて宇賀魂神なり
祭礼ハ九月九日神輿二基あり

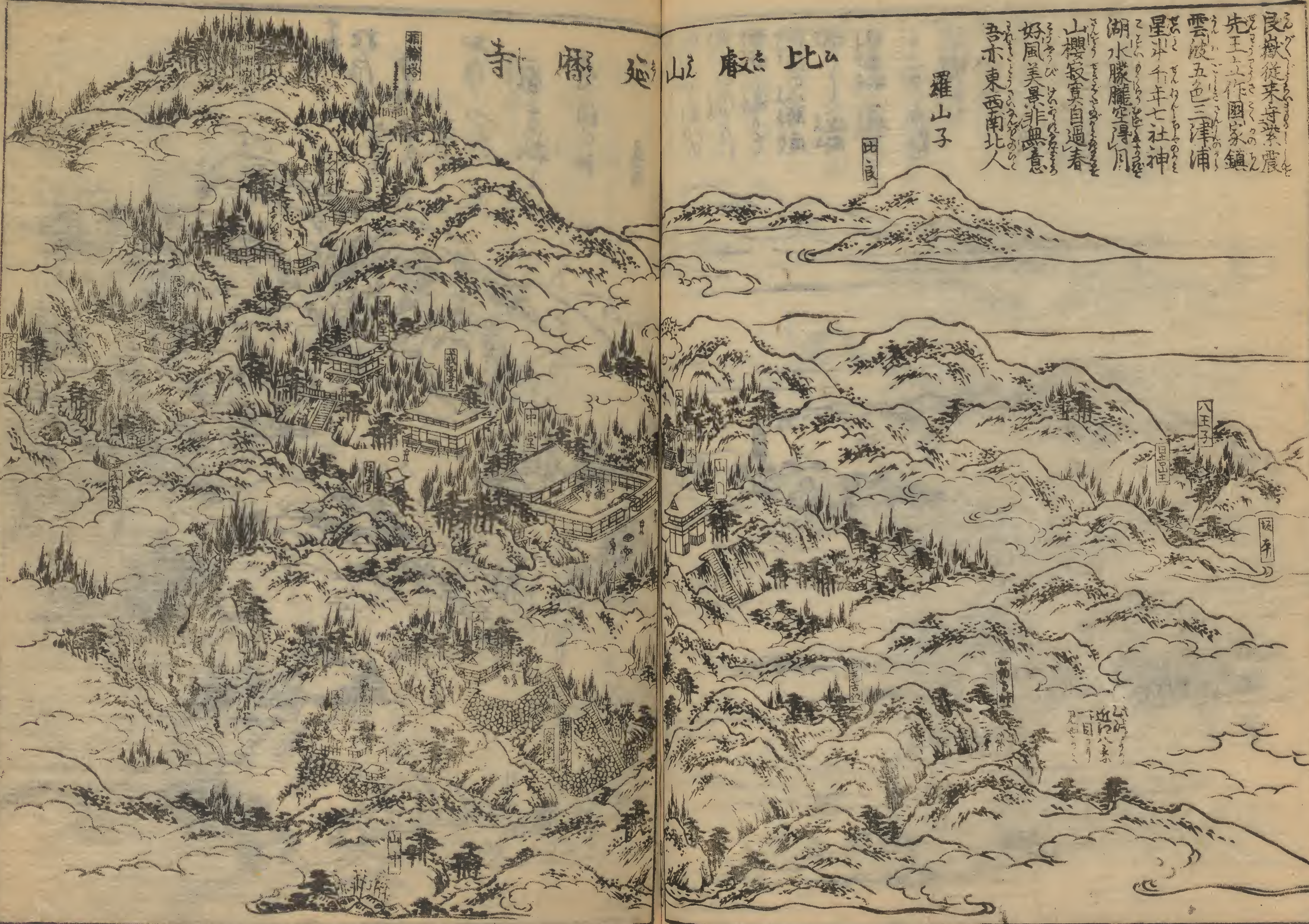
巌嶽不動寺の峠より琵琶湖をながむればしんかうせい楽く波や丹穂てり沖の舟ハ白帆にかくれ辛崎の松ハ夕しぐれに翠れ色おちて浜のまへ砂地ま駒が丘そ比良の高根の花紅アんでと詠し頼政の昔も思ひ出られ猶か王維が山水れ画賦小遠人小目うつし老山ハ樹す馬豆人の掟もしも所なれ雙眸に遮りく淡海の八勝連錦として近衛政家卿も魂をうごかし給ひし佳境なり

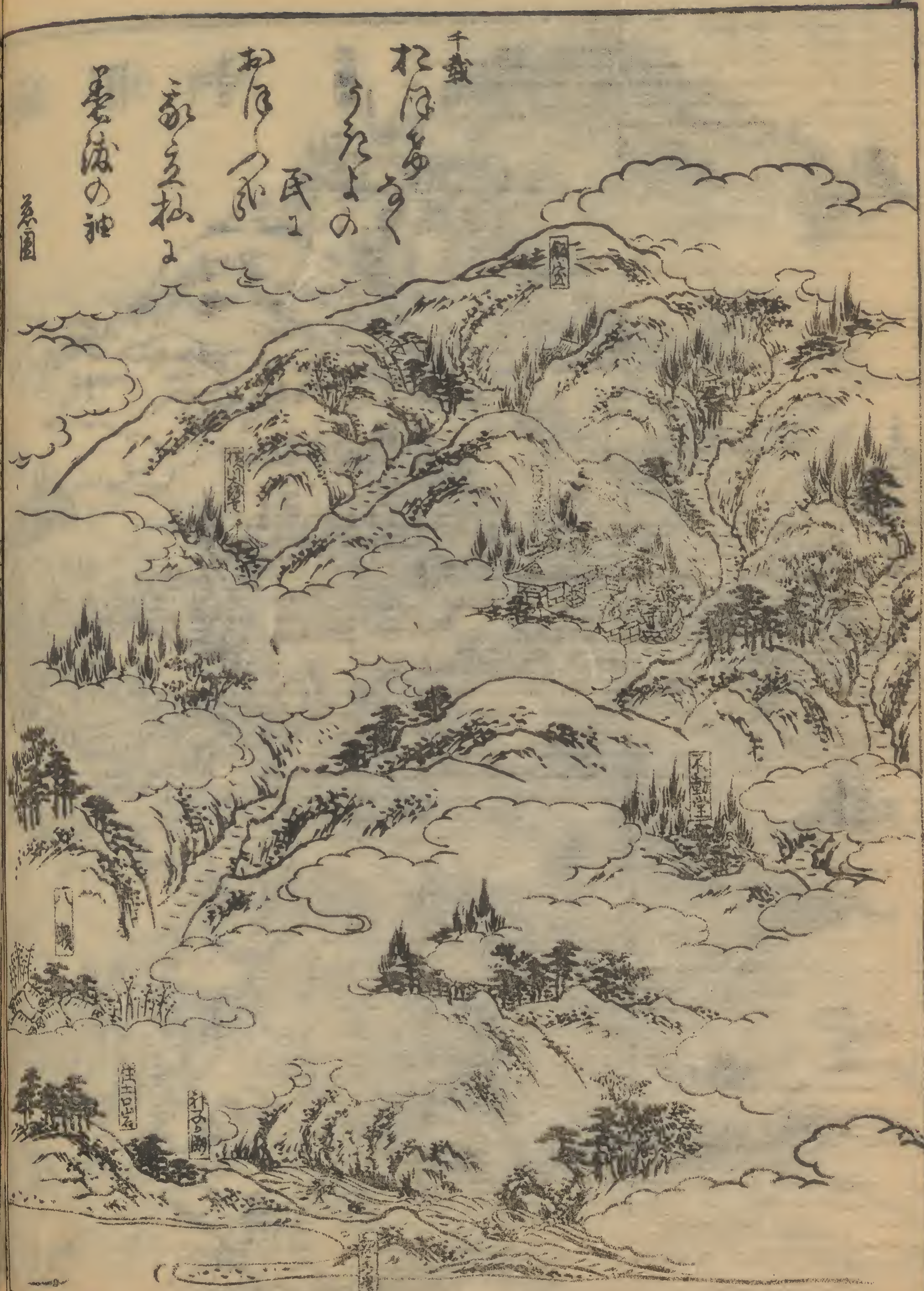


比叡山延暦寺

艮嶽従来守紫霞
先王立作國家鎮
雲波五色三津浦
星斗千年七社神
湖水朦朧空淨月
山櫻寂寞自過春
好風美景非無意
吾亦東西南北人

羅山子





比叡山延暦寺一乗止觀院は本朝五岳の其一つにして王城鬼門に當れば叡峰とも號をうしめ日枝山と書し後桓武天皇の御宇延暦年中に傳教大師と叡慮を等しく帝都鎮護として根本中堂を建営しありけり比叡山と改らる又別名ありて天台山我立杣良岳鷲峯台嶺叡嶽大日枝小日枝等の号あり

比叡山中堂建立のうた

新古

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣に冥加あらせ給へ　傳教大師

愛宕山の一の峯はかり日枝山なりこれは駿河の富士をつみたらんかほどにて杣のうたといふ

拾遺

我立のおもひはかりまかすれば都のうちといはれぬるかなと　読人しらず

東塔　止觀院と號を西塔横川を合せて三塔といふ

東塔の東谷に十一坊西谷に十一坊南谷に十二坊北谷に十二坊あり

根本中堂　本尊は薬師佛開基は傳教大師の作なり　一乘戒壇堂　釋迦文殊彌勒を安置す弘仁十四年に造立ありて義眞大師へ授る本尊は大日如来なり　慶のまた漢土の五臺山の文殊を荷擔しきたり戒壇を下に埋めり　文殊樓　五臺山から移して本尊とす　大講堂　大日如来を安置す　文殊菩薩を安置す　梵天帝釈文殊を安置す深草天皇の御願也　前唐院　慈覺大師の廟堂なり　千手堂　千手観音を安置す　太食執行の小さき勅使参向の堂なり

山王院　智證大師の本房にして山王の社あり新向の坊といふ名あり平相國清盛熱病の時此水を石に施して浄を沐をとりける　千手井　又の名を千日参籠して此水を毎日閼伽とせしとなり　西塔武蔵坊千手堂より

淨土院　傳教大師の廟堂なり寂光院と號す　俗姓は三津氏江州志賀郡の人也

西塔 寶幢院と號す西塔の東谷に九坊南谷に十坊北谷に十二坊西ハ淨土院とかぎりて谷川を境とす

法華堂 本尊ハ普賢菩薩なり 轉法輪堂 本尊ハ釋迦文殊四天王承和元年勅により延秀闍梨造立なり 常行堂 常行三昧の道場也 阿彌陀佛を安置す寛平五年静観僧正建立なり 椿堂 如意輪観音を安置す山門建立以前聖徳太子此山に登て勝地を求て此本尊を安置す又椿の御杖を伽藍に植ゑ立置れしが後に枝葉茂りて 寶幢院 慧亮和尚の廟なり 相輪橖 王城の東北にあたりて本を移す年経て荒廃に及び今ハ小堂あり 傳教大師の銘あり俗に鬼門柱といふ高さ四丈五尺九層あり十一の寳鐸を懸く弘仁十一年歳次庚子九月十五日 青龍寺 黒谷にあり本尊ハ釋迦十一面観音を安置す法然上人此所に住せし 黒谷といふ本像あり俗に元黒谷といふ

横川 楞嚴院と號す十四坊あり

中堂 本尊聖観音ハ慈覺大師の作 脇士ハ毘沙門不動なり 慈恵大師廟 俗姓ハ木津氏なり江州淺井郡の人なり大師の影像安置す 横川御廟に就て安置す都鄙の諸人日々に多くあつて靈惟新なり 慈恵大師の開基之 元三大師と號す 龕あり故 大師堂 村上天皇の御願なり 弥勒如意輪不動山王を安置す 名とす 四季講堂 四季に講す 觀音堂 とい ふ額諸来向者皆不二門の額ハ 慈忍和尚廟 飯室 横川の別所之寶満寺 安楽院 恵心僧都住の人所之本尊阿弥陀佛 慈覺大師の筆之首楞嚴院に掛る 横川の別所之寶満寺 とい ふ不動堂あり 恵心の作又恵心の像 業花樹あり是ハ恵心僧都の制作しけ 往生要集を宋國へ渡れし 慈忍和尚の弟子尋禅といふ 天台座主 九条殿 師輔卿の十男なり

擬の人ハ思れ枝葉繁茂しけり元亀の兵火に滅しける所十有九年を経て此地に枝葉出て再生す山門是より再興す乃ち故に後鑑の樹と謂へし ○當院に霊験 僧都のまゝ後世中ひ法華經一萬部精誦ありし時 釋迦普賢の尊像忽然として壇上に顯れ感應をとらる

無動寺 或ハ無幢寺に作れ 此所に坊舎十三坊あり

不動堂 本尊不動は相應和尚の作なり染殿の皇后に靈鬼の障碍ありし時相應和尚此不動に祈て此所の日夜經をよんで靈鬼退散を故に染殿后より此所を建立ありしと

大乗院 慈鎮和尚住せし所なり此院の上に墳墓あり又本尊の親鸞聖人

もさらに住せしゆへ天台の学文ありしなり當院ハ山中第一の遠景なり

山王七社の中客人宮ハ此谷の守護神なり

就るの山のちの月ハめくりきて我まつ松の葉をしるとも

辨財天 竹生嶋より此地に白蛇と化して影向ありしゆへ宮のうしろに

影向石あり叡聖人弘法の為此宮に祈誓ありしとぞ

雲母坂不動堂 本尊不動明王ハ傳教大師の作なり 南光坊 雲母寺の額ハ石川丈山の筆なり 戒壇堂の傍に ... 是ハ日光御門主の ...

當山名勝

四明嶽 叡岳第一の峯也雲母坂より登りて右の小径あり山上に石佛一尊あり此より四方をみれハ眼下に近江の湖はるか...晴れたる日ハ西海の淡路四国の海... まてみゆるとかや

滿土混論辻 大講堂の坂東へ下る所也に辻あり 出現の地なり大黒堂あり ... 此ハ往の ... 傳教大師出世の時大黒天出現 ... 東へ ...

東谷より坂本へ下る宝地坊 證眞の旧跡 登天石 東塔院南谷 無動寺 ... 此所に

元三院あり 根本中堂の ... 遊なり 法性坊 ... 尊意僧正の旧跡

あり叡神此石の礒く**常光坊** 此ものの前ハ絶景にして中秋の月佳境之一ツ子坂
登天しこまつといふ 又此辺ハ楓多くありて紅葉の時も眺望あり
戒壇院の後ろ **青龍石** 西塔千手院の大嶽に大蛇あり龍の口を作りて形を見す 紀僧正此石に坐して七
石へ下りあり 此石に至れハ人多く死ぬ 千手院の静観僧正
一七日加持しけれハ忽ちにして黒雲度び山谷震動し **二尊石** 横川ニ有 傍ニ大岩二ツ
岩石くだけ散しけるより崇ずしとぞ 宇治拾遺に見えたり 並の向ひに岩石貫許 **阿字体具足** に切石
あり此所 **五百羅漢石** 道より西の谷の向ひに岩石ありて五百羅漢聖衆皆定此所なり 坂母山
魔境といふ 是八山城近江の境にて西へ八町の里へ
あり此嶺廻峯れ行者 **釋迦多寶佛** 横川へ行く ありて東ハ横川へいたる 華表園より西乃嶺
王城加持修行の所く 寒嵐嶽 華表園より西
又小比叡ともいふ 横川へ行たの方山の半腹に大巌あり 峯をいふなり
神社ハ白鬚明神鈞を垂し所なり 此ミを
華表園 横川の分地なり 又不二門ともいふ 是より **阿弥陀峯** 恵心僧都 香井の下に立て西を臨む 二峯あり 昔
又慈覚大師 **蟻塚** 路の傍にあり 石垣を築し小径にあり 湘庭和尚 恵心僧都 弥陀来迎の 通ひ路 横川中堂の 所之
しともいふなり 大雨頻りに降て前路崩れ 山蟻 数萬 集りしく 数日 時 由
を聞て従僧を 和尚 奥のちひを 竜池 又赤山ともいふ 慈覚大師 法界 して
すして此所にあり 龍神の 寶珠 を 龍宮に 秘し置て 蟻塚といふ
此所にて 如法水 御井之 中堂の東の **独鈷水** 大師 鑒開の水 又霊 水とも 慈恵 大師 横川 無動 寺の 傍 八王子
祈りて **護法石** 下にあり 此所に **椿生谷** より 道にあり
のうち **衣掛石** 和労堂より八王子に **五男二女降石** ある
にあり かくら小径にあり 横川へ出る道の 傍より 定家卿 此山に 語あり
戒心谷 沢の上に下りあり **定家卿墓** 横川へ出る 道の 定家卿 此山に
行跡にあり 登臨し 此の 所 叙する ばかりの 石 に 語 あり
定家
踏たえし 忍ぶしの ぶ この 山の おく 見てもあり
定家

奈良坂 横川より坂本へ下る道といふ **蛇池** 横川の 香 無動 坂を 登て たの みの かくら ん
春日明神 影向の地なり 出る ところ あり 今 ハ 荒 廃 して 地蔵堂 ありて 脱俗院と 号す
水飲 是無動坂の中途にあり 昔 ハ 地蔵堂 ありて 脱俗院と号す **音羽谷** に あり
恵心寺の阿弥陀仏 安置 薬師堂 くるる 遷佛 あり 所之 いふ
瀧あり それ 此所 音羽の瀧 と いふ
今ハ山 顛て 跡なし

古今
ひえの山なる音羽の瀧を見てよめる 忠岑
落たぎつ 瀧の みなかみ 年 つもり 老に けらしな 黒き 筋 なし

拾遺
横中納言 敦忠 西坂本の 山荘の 瀧の 岩に かきつけ ける 伊勢
音羽川 せき入て 落す 瀧つせに 人の心の 見えも する かな

古今
ひえの山の かりて 帰りけるを 見て よめる 貫之
山 たかみ 見つつ 我 こし 櫻 花 風 は 心に まかす べ らなり

玉葉
世を 祈る 心 立 松の 峯 晴て 身 より すむ 秋の 夜の 月 朝 ノ 法 ご 家 良

ひえの山に 二月 の 末 に て 花 を 見 て 帰る に 花 の 散る 所 見 て 散る 花 つくし
せん らくる 人の 山 よりひの かし 詠み けれ 身 の 心 に かも あるべし
すらひ なる みな 思 ひ 出 て

続古
法 性 寺 入 道 前 関 白
山川 もろく 鷲の 高嶺 に 澄 月の 影 や 麓 に 真 志 賀の 浦 法 性 寺 入 道

新勅
大嶽 の あと 吹 風 に 雲 晴て 深く 見 えれ 山の 月 も くもりなき
慈圓

風雅
三 の 峯 二 の 谷 分け て 入る 空 そ 我 立 杣 に 名 を そ ふる なれ
慈順

日吉山王七社ハ比叡山の守護神なり東坂本にあり本社七座攝社十四座

凡廿一社なり例祭四月中申日

大宮 大己貴命 本地釋迦
二宮 國常立尊 薬師
聖真子 正哉吾勝尊 阿弥陀
八王子 國狹槌尊 本地千手観音
客人 伊弉冊尊 本地十一面観音
十禅師 瓊々杵尊 地蔵
三宮 惶根尊 又豊斟渟尊 普賢
以上七社

下八王子宮 天御中主尊 虚空蔵
王子宮 建御名尊 文殊
早尾 素戔烏尊 不動
大行事 高皇産霊尊 毘沙門
聖女 下照姫 如意輪
新行事 瀛津姫 吉祥天女
牛尊 下小霊 八王子の御子 大威徳
小禅師 彦火火出見尊 弥勒菩薩
悪王子 隠秘 愛染
岩瀧 踏鞴姫命 弁財天
氣比 仲哀天皇 聖観音
釼宮 素戔烏尊の荒魂 不動
大竈 奥津彦命 大日
竈殿 奥津姫命 金剛界大日
以上十四社

若宮 國常立尊 比叡辻にあり
護國
女別當社 二条院勅願 唐崎の神社 大宮末社の内

続後撰 聖真子宮によみてまつりける
やはらくる光ハへ（？）そのもとに 西の麓れ秋乃よの月　祁良仙（？）

日吉によみてまつりける歌の中に大宮を
いにしへの鶴の林の散花の匂ひをよする志かの浦風　後京極摂政

久かたの天津日吉の神まつり月のかつらも光そへけり　道因